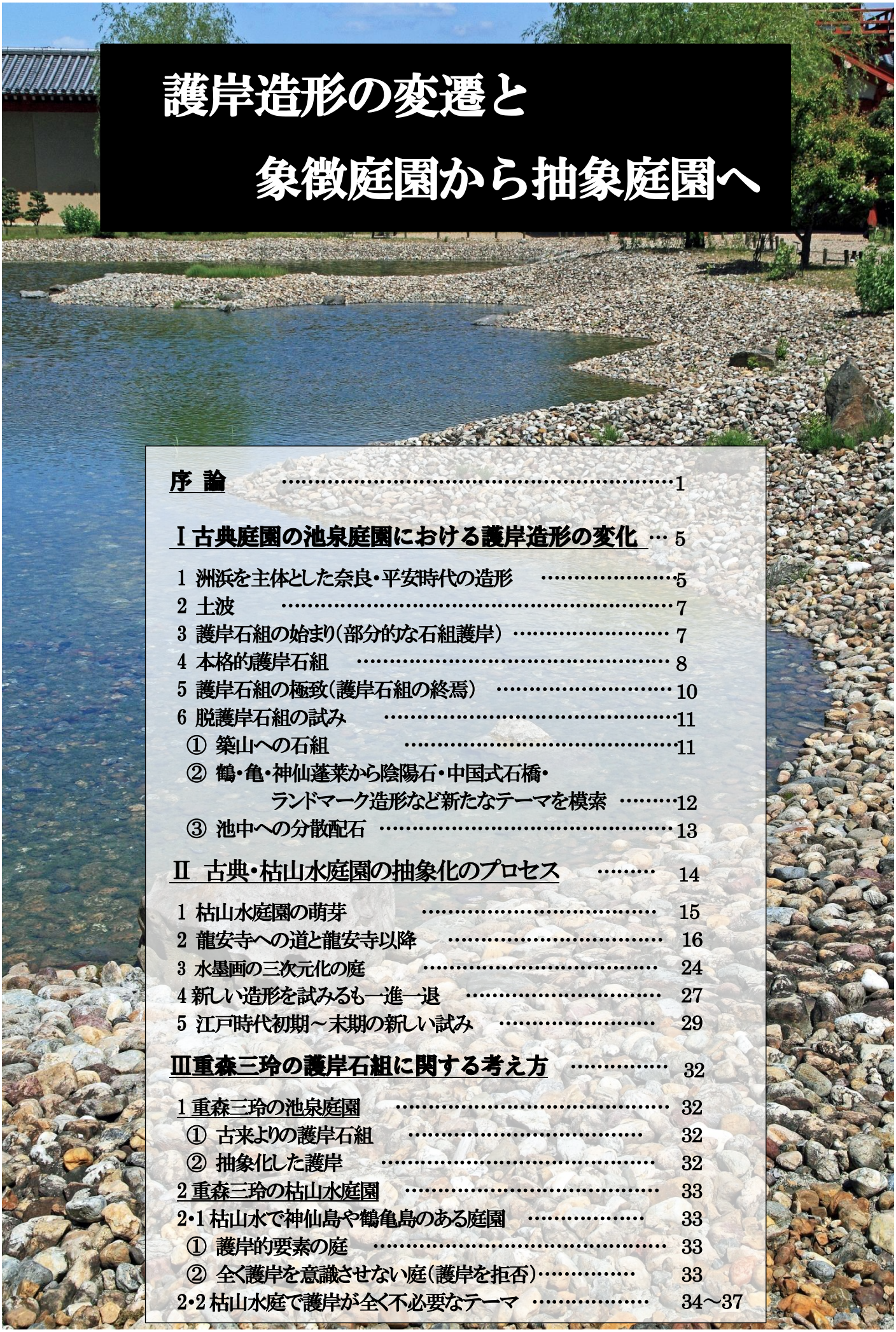


護岸造形の変遷と
象徴庭園から抽象庭園へ

序 論 ……1

Ⅰ古典庭園の池泉庭園における護岸造形の変化 … 5

1 洲浜を主体とした奈良・平安時代の造形 ……5
2 土波 ……7
3 護岸石組の始まり(部分的な石組護岸) …… 7
4 本格的護岸石組 …… 8
5 護岸石組の極致(護岸石組の終焉) …… 10
6 脱護岸石組の試み ……11
① 築山への石組 ……11
② 鶴・亀・神仙蓬莱から陰陽石・中国式石橋・
ランドマーク造形など新たなテーマを模索 ……12
③ 池中への分散配石 ……13

Ⅱ 古典・枯山水庭園の抽象化のプロセス …… 14

1 枯山水庭園の萌芽 …… 15
2 龍安寺への道と龍安寺以降 …… 16
3 水墨画の三次元化の庭 …… 24
4 新しい造形を試みるも一進一退 …… 27
5 江戸時代初期～末期の新しい試み …… 29

Ⅲ重森三玲の護岸石組に関する考え方 …… 32

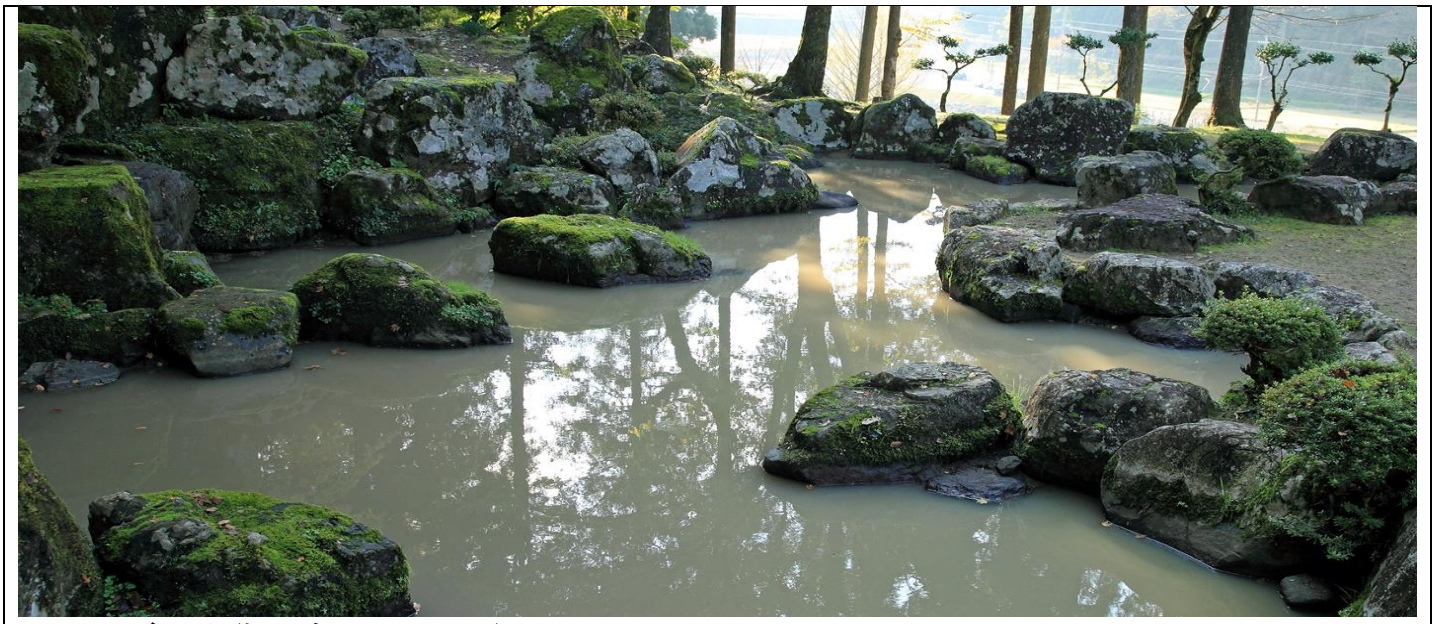
1 重森三玲の池泉庭園 …… 32
① 古来よりの護岸石組 …… 32
② 抽象化した護岸 …… 32
2 重森三玲の枯山水庭園 …… 33
2･1 枯山水で神仙島や鶴亀島のある庭園 …… 33
① 護岸的要素の庭 …… 33
② 全く護岸を意識させない庭(護岸を拒否)…… 33
2･2 枯山水庭で護岸が全く不必要なテーマ …… 34～37

序　論：当資料は以下の三章で構成されている。結論的には飛鳥時代から始まる「神仙蓬莱思想」に由来する不死の願望が、鶴亀島石組を生み出した。このテーマは池泉庭園では勿論のこと、護岸の不必要な枯山水庭園においても鶴亀島の呪縛から逃れることは容易ではなかった。脱護岸石組の試みは、各時代行われたが、雪舟、小堀遠州、重森三玲らによって克服された。現代においても抽象庭園の各種試みがなされている。内容が入り組んでいるので、序論（1～4P）で大まかな荒筋を記述して、詳細は5～37Pに記述したい。

「Ⅰ古典庭園の池泉庭園における護岸造形の変化」の概要

池泉庭園：池泉庭園であれば必然的に護岸を必要とした。池泉庭園と云えば不老不死信仰に由来する鶴島、亀島の護岸になる。このような造形手法が極地に達すると、護岸石組以外の造形の模索が始まる。池泉庭園における亀島の造形からの脱皮は容易でないが、その試みは江戸時代の大名庭園に始まる。

1護岸石組の完成：奈良時代に洲浜から始まった造形は、室町時代末期に完成した。その好例を下に示す。



一乗谷朝倉氏庭（福井市・1471～1573）：諏訪館跡庭園の護岸は小ぶりな石ながら、出入りのある美しい石組

2護岸の極致：神仙思想に由来する鶴島・亀島の護岸修景は二条城や徳島城で極致に達した。

二条城（1626）：護岸への石組は隙間なく行われているが、神仙島（蓬莱島）への石組は行われず、傘形の松のみ

3 脱護岸石組の試み：護岸修景の鶴亀島からの脱皮は江戸時代の大名庭園で幾つかの方法を試みられたが、最も着目すべき「池中への分散配石による抽象化の試み」を下に示す。

玄宮園（彦根城・1677）：池中への抽象的分散配石は、水により配石状況が一層明確になる（白砂と同様の効果）

「Ⅱ 古典庭園における枯山水庭園の抽象化へのプロセス」の概要

枯山水庭園の場合は池泉庭園とは異なり、護岸としての石組は不要であった。
現代の視点から考えれば、池泉庭園の様な紆余曲折を経なくても、抽象庭園がもっと早くに多く出来ていてもよさそうである。しかし、池泉庭園のテーマの大半が神仙島（亀島や鶴島）である事から、枯山水庭園であっても神仙島のテーマから一気に離れることはできなかった。一気に完全な抽象庭園を目指すことは無理かと思う。少しずつグレードアップした庭が出来、その庭の手法を理解し、試行錯誤を重ねたに違いない。以下にその経過を確認したい。

1 龍安寺の系譜

龍安寺が出来るまでと、龍安寺が後世の庭に与えた影響の造園手法の確立過程を示す。その手法として弧状石組、横三尊石組、遠近法的構成、借景式、環状石組がある。この序論では龍安寺式の庭園の帰着点とも云える桂家庭園を例示するが借景式、弧状石組、遠近法的構成である。

桂家庭園（防府市・1712）：弧状石組は 15 石の拘束を離れ、類型のない形の抽象庭園を生んだ。

2 水墨画を三次元化した庭

禅院の襖絵は観瀑の絵で満たされた。このような影響で庭園においても水墨画の手法を採用するようになった。水墨画による山水の風景をテーマとするのだから、必然的に不老不死（鶴亀蓬莱思想）に関するテーマからから決別することになった。この例は大仙院・退蔵院・岐阜城・福田寺・阿波国分寺・粉河寺であるが、ここでは福田寺を例示する。

福田寺（米原市・1643）：右側の傾斜した石は水墨画のオーバーハングした厳の象徴

3 江戸時代の成果：「抽象枯山水庭園」と「空間構成美の庭園」の完成

①龍安寺の系譜から脱却した新しい抽象枯山水の庭の例は東海庵、久留島家庭園があるが、ここでは、久留島家（栖鳳楼庭園）を例示する。

②瞠目すべき石組構成美の庭として阿波国分寺・青岸寺・粉河寺がある

久留島家（玖珠町・1832）：個々の石は完全に独立した分散布石を意識して抽象化造形を達成した

「Ⅲ 重森三玲の護岸石組に関する考え方」の概要

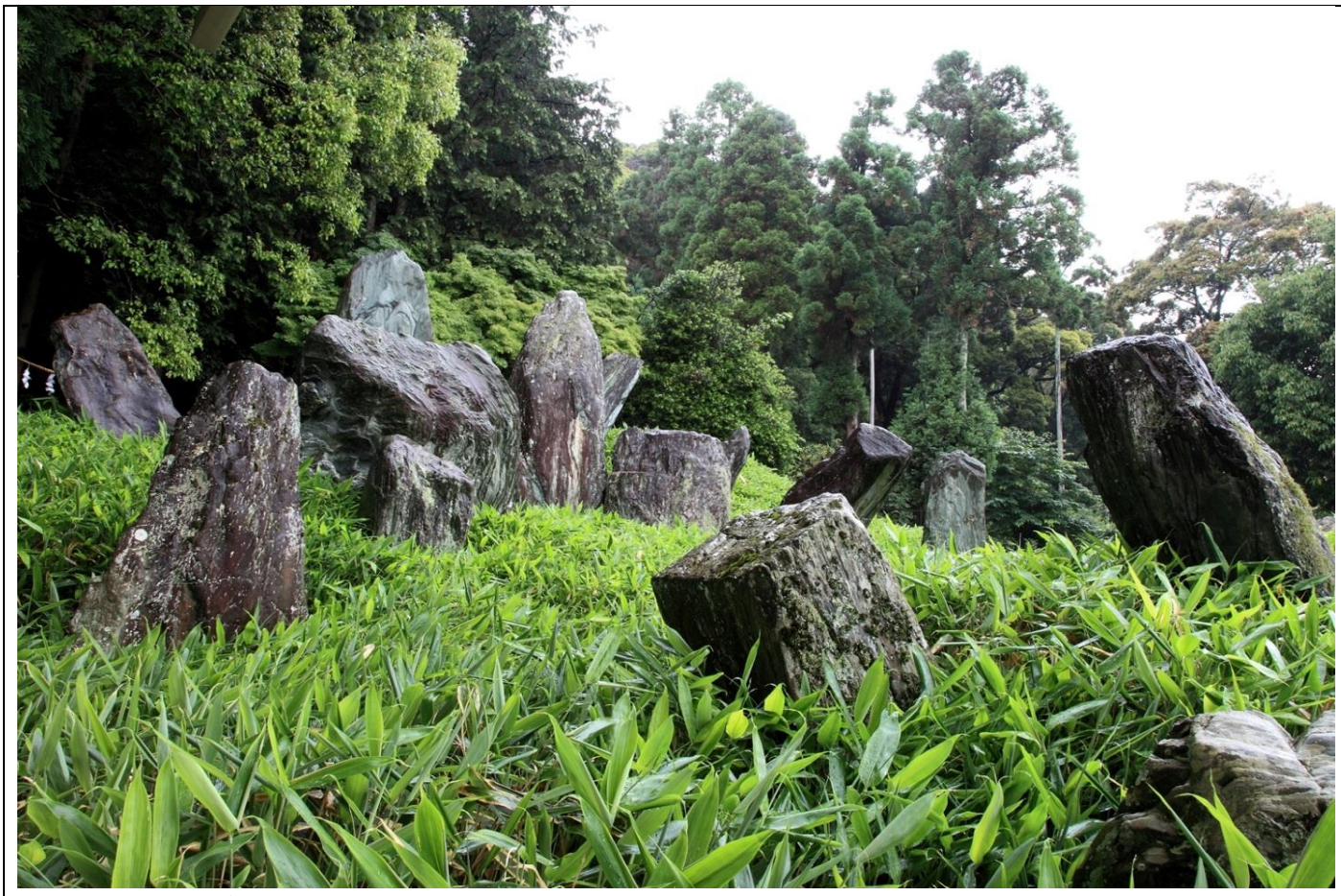
重森は現代においては池泉庭園を作ることは地理性、財政上事実上不可能と理解し、徹底的に住宅街における枯山水庭園を志向した。

1 全く護岸を意識させない庭（護岸を拒否）

神仙蓬莱島をテーマに採用しているが、海洋に浮かぶ島々である事は造形上で解らせようとしていない。もし、この造形に護岸らしき石組や洗出し工法を行ったならば、禅寺としての厳粛な雰囲気は失われてしまうだろう。重森は神仙島の説明よりは造形本意の石組に傾注した。その代表例は東福寺本坊の庭を示す。

東福寺本坊・南庭（京都市・1939）：護岸無き神仙島。枯山水庭園とはいえ神仙島をテーマとすると、造形は必然的に海洋に浮遊しているが、重森は護岸石組を行わず、芸術性を求め造形本意の石組を行った。

2 枯山水庭で自由なテーマの選択：象徴庭園から脱皮した抽象庭園が可能になった



松尾大社（京都市・1975）；松尾山の神々が降臨して自由に語らっている姿。石組の空間構成美の傑作

Ⅰ古典庭園の池泉庭園における護岸造形の変化

1 洲浜を主体とした奈良・平安時代の造形

東院・宮跡・浄瑠璃寺・毛越寺の護岸は栗石で丹念に作られている。造形は洲浜、須弥山、荒磯、曲水。

東院(平城京・750)：全庭が栗石による洲浜のデザインである。また要所々々には選び抜かれた石が配されている。

東院：反り橋際には須弥山石組がある。1250 年前にこのようなテーマを選択し、実際に組まれていることに驚嘆する。

宮跡(平城京・750)：「曲水の宴」が行われていた迎賓館前の庭。洲浜先端の荒磯の風景と曲水がテーマ。

浄瑠璃寺(木津川市・1107)：最近復元された栗石の洲浜が美しい。極楽浄土の世界を髣髴させる。

浄瑠璃寺(木津川市・1107)：荒磯先端方向から撮影

同左：中島の荒磯の背後に三重塔が見える。

毛越寺(平泉町・1087～1189)：須弥山石組

洲浜：重森はこの洲浜に感動して、光明院に枯山水の池に洲浜を再現。

毛越寺：遣水のデザイン

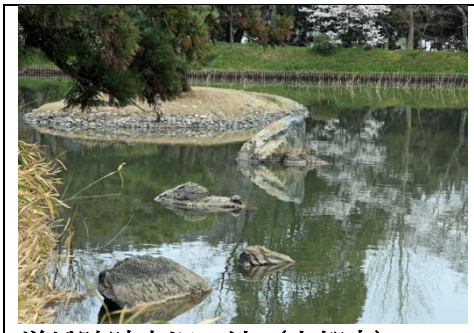
同左：栗石護岸への石組の始まり

神仙島を出島の形で表現した最初の例

備考） 毛越寺（平泉）には日本庭園の最初期のデザインがそのまま残っている貴重な例。

2 土波

池庭においては大規模な庭園の護岸は上記栗石で出来ている。しかし、見えにくいところは金閣寺などでも土波が残っている。



嵯峨院跡大沢の池（京都市）

称名寺（横浜市）

円成寺（奈良市）

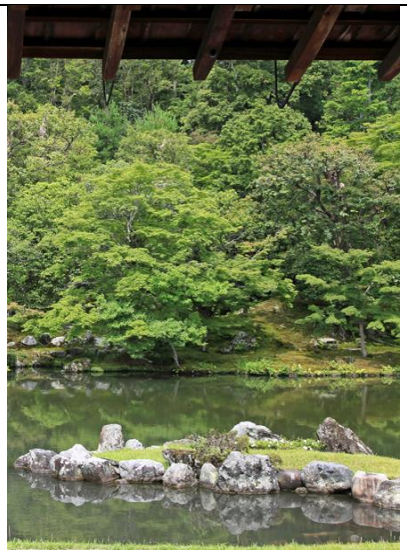
3 護岸石組の始まり（部分的な石組護岸）

鎌倉時代になると水墨画の影響で、岩組を鑑賞するようになる。その最も早い例が天龍寺である。庫裏から眺める山畔に雛壇状に組まれた龍門瀑は水墨画の世界だ。

西芳寺においては平坦部においては下記に示す長島の護岸に石組がされているが、金剛池、黄金池の護岸は殆ど土波である。いっぽう山畔上にある供隠山石組、龍淵水石組、碑亭跡石組などは石組造形である。

西芳寺における長島の三尊石組（池泉部）、山畔上の枯山水部の龍門瀑、龍淵水、碑亭の亀島などの石組は、後世の石組の基準となった。

天龍寺（1339）：本堂正面には豪華な滝があるが、局部的な一点豪華主義の石組



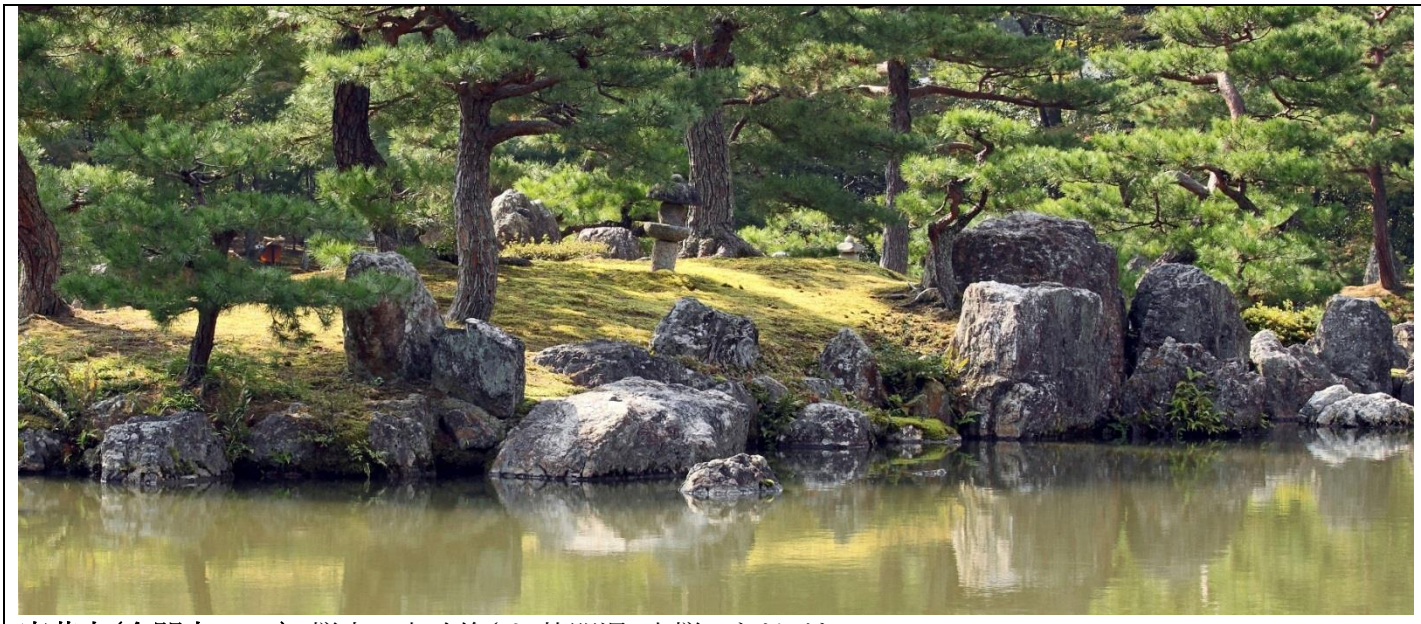
同左：滝の右側は土波のままだ

西芳寺（1339）：池泉部では長島に限って巨石が組まれている。なお、手前の岩島は初めての鶴島か（亀島は視野外の右上にある）

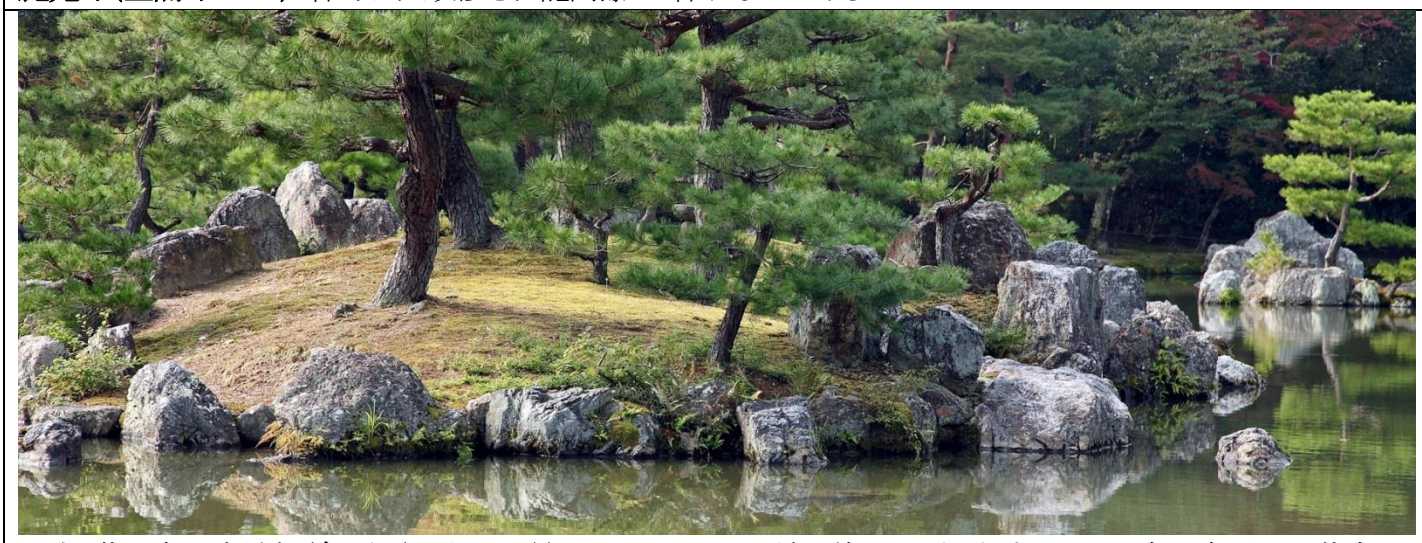
同左：金剛池、黄金池、朝日ケ島など大半が土坡

4 本格的護岸石組

金閣寺に始まる護岸石組は、保国寺、朝倉遺跡、旧秀隣寺、北畠神社を経て戦国時代末期まで続く。

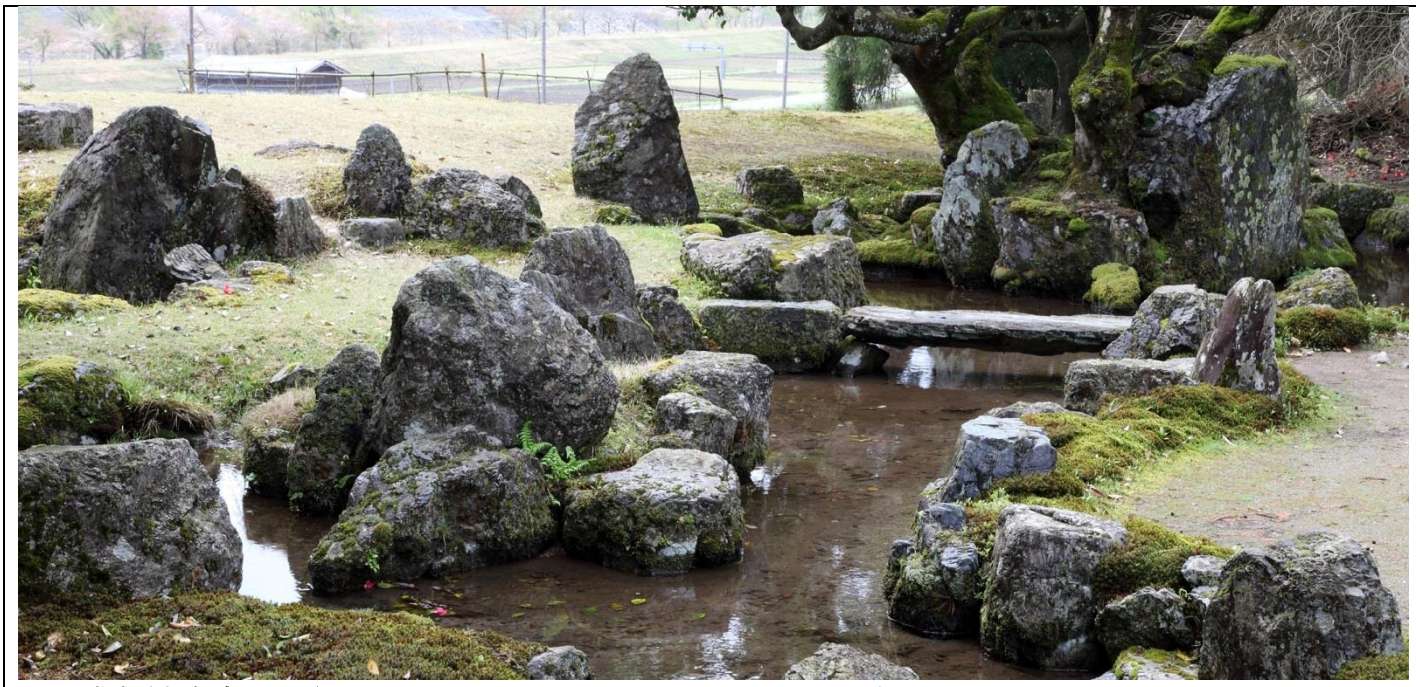


鹿苑寺(金閣寺.1397):禅寺に大改修され龍門瀑・坐禅石などがある

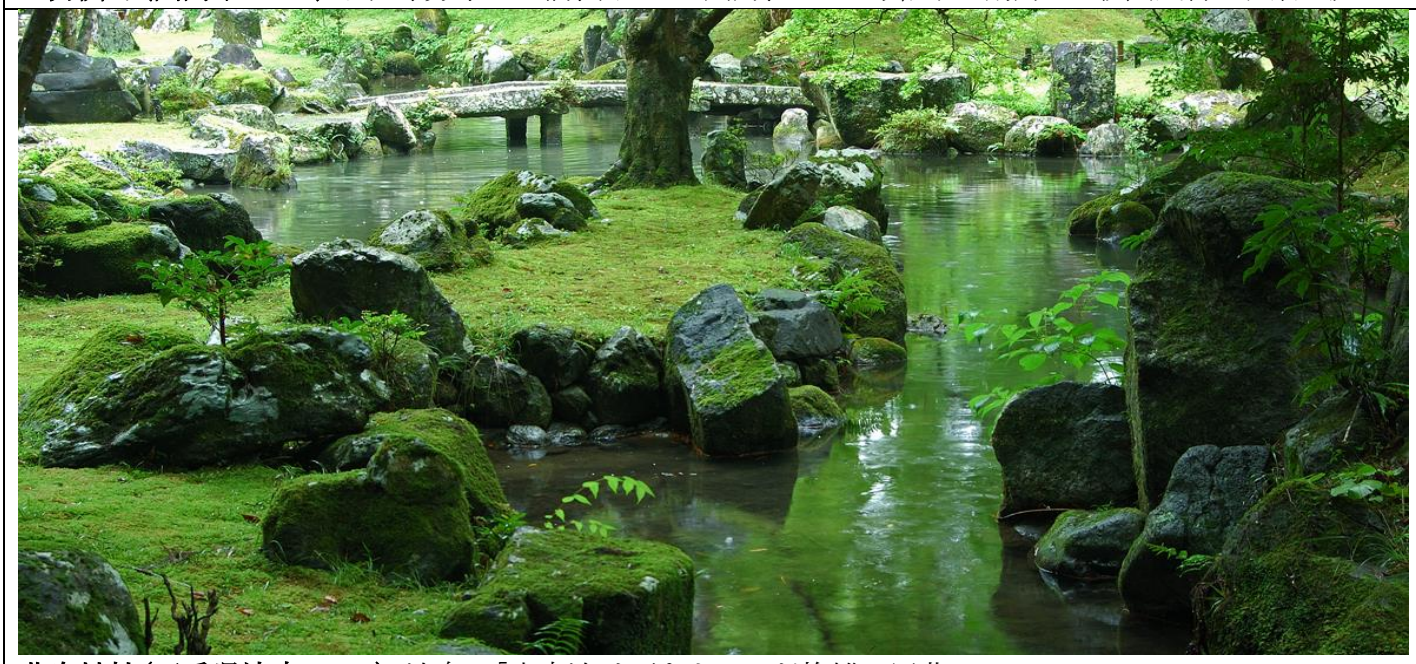


同上;葦原島は先端部(亀頭石)から見た景は、まるで巨石の鎧を着せたようだ。なお、この島の意匠は西芳寺の長島に倣っている。

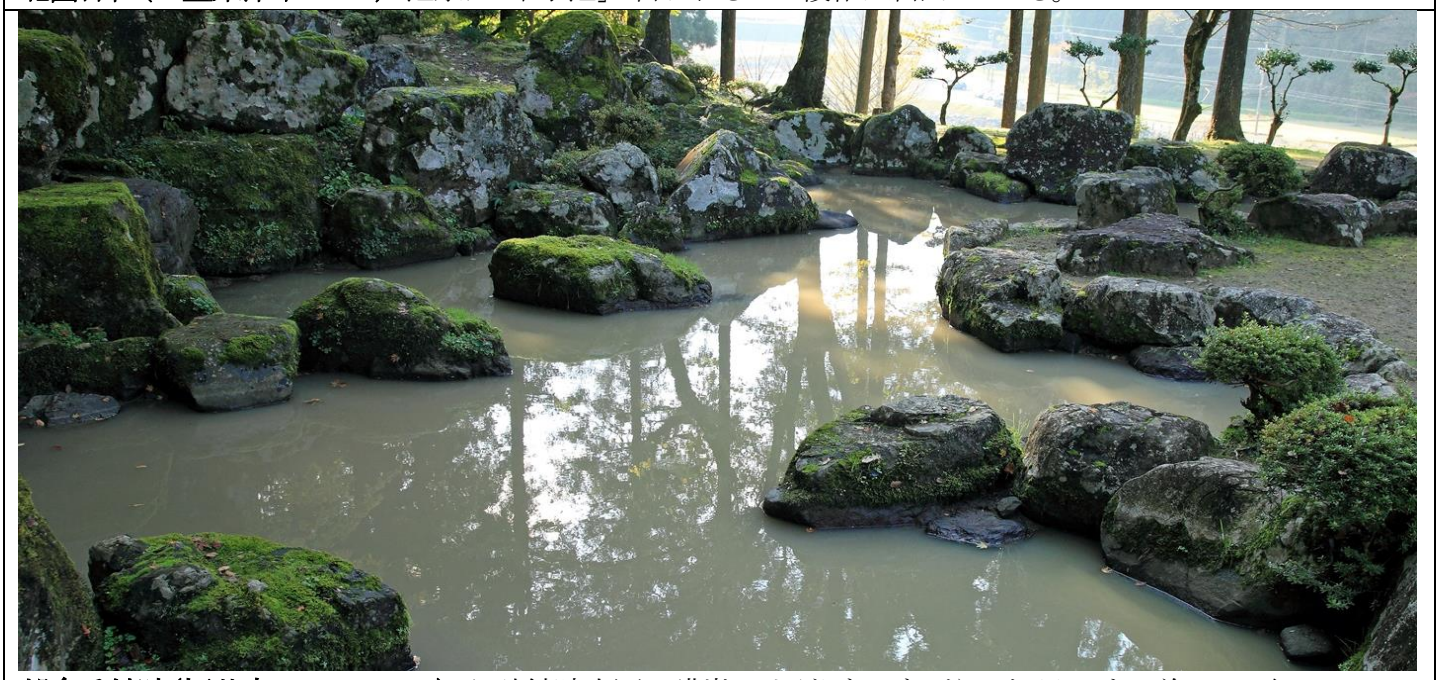
保国寺(西条市・1400):立石の効いた立体構成美の庭の代表例



旧秀隣寺（高島市・1528）：要石、分厚い石橋、屈曲した出島、一石で象徴する鶴島など戦国武将の白眉の庭



北畠神社（三重県津市・1529）：池泉は「米字池」と言われるほど複雑に屈曲している。



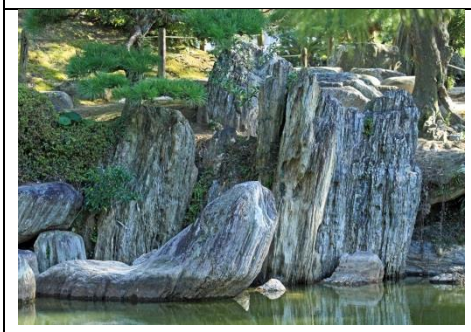
朝倉氏館跡（福井市・1471～1573）：諏訪館跡庭園の護岸は小ぶりな石ながら、出入りのある美しい石組

5 護岸石組の極致（護岸石組の終焉）

二条城は小堀遠州によって改修が行われた。一方、徳島城庭園は上田宗箇が作った。二人の天才には共通点がある。両者とも護岸庭園の極致とも言うべき庭園を作ったが、両者とも護岸のみの石組に限界を感じていたのではなかろうか。小堀遠州は仙洞御所では直線護岸を試み、金地院では枯山水庭園ゆえに、護岸が無いのは当然としても、鶴島の背中には巨岩で覆い尽くした。一方、上田宗箇は同じ徳島城庭園でも枯山水部に於いては、石で覆い尽くされた鶴島を作り、枯滝部では龍門瀑をテーマとして、鯉魚が龍に化身した姿を象徴的な造形で示した。また名古屋城庭園では深い濠を掘り、その峡谷への石組には護岸石組を超越した凄まじさを感じる。

二条城（京都市・1626）：護岸への石組は隙間なく行われているが、神仙島（蓬莱島）への石組は行われず、傘形の松のみ

徳島城（1602）：鶴島と亀島および鶴亀島間の橋や亀島への皺の入った橋石など名石尽くし。一方枯山水部にも見るべき造形が



徳島城：巨大な舟石と三尊式枯滝

徳島城：出入りの多い護岸石組

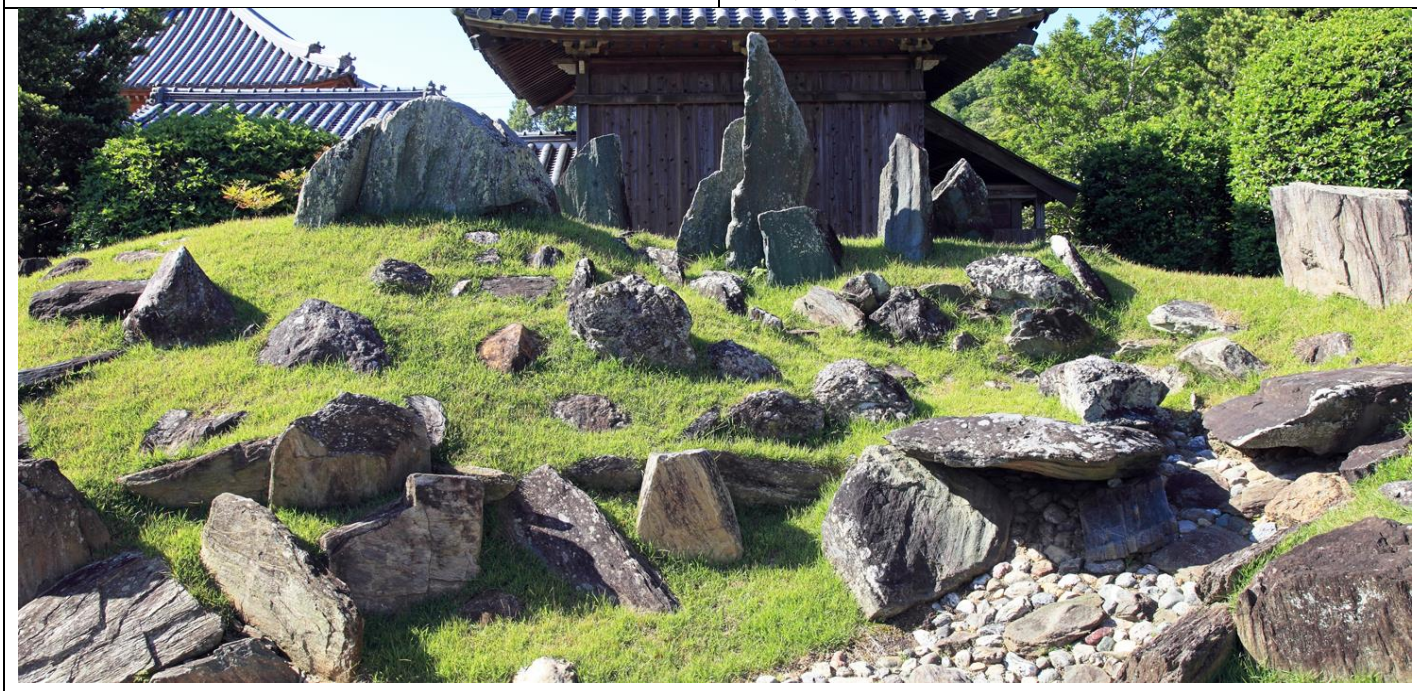
徳島城：遊びの多い護岸石組

6 脱護岸石組の試み

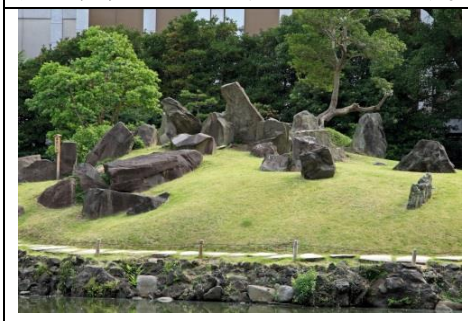
① **築山への石組**：鶴亀蓬莱から脱皮した造形は築山上にされるようになった。

徳島城：枯山水部を見れば更に自由な造形化が解る

円徳院(1624)：護岸が無く、山畔や築山に分散配石



阿波国分寺：発掘調査で江戸末期。築山に絵画の様な造形が作られた。特に画面左下の石組は護岸を超越した



芝離宮：護岸よりも築山の石組に力点

芝離宮（東京都・1686）：蓬莱山や、中国式の石橋など多彩なテーマが多い

摩伽耶寺（浜松市）：石組は護岸と 3 連の築山および手前側にもある

大福寺：石組は出島と築山にもある

② 鶴・亀・神仙蓬莱から陰陽石・中国式石橋・ランドマーク造形など新たなテーマを模索

護岸に石組をしない方が背後の陰陽石が目立つことを習得した。大名庭園においては子孫繁栄が重要なテーマとなり、陰陽石の見せ所場である。また儒教の影響もあって中国式の石橋がテーマであり、または池の中央にランドマークになる特殊な造形を配するなどして、多機能化し護岸の修景の必要性が無くなった。

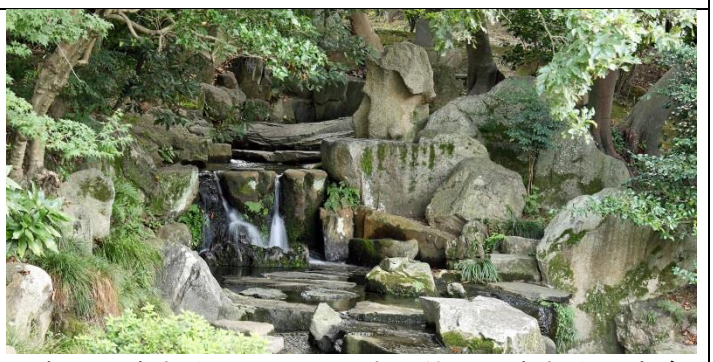
小石川後楽園(1634)：目を引く徳大寺石と蓬莱山

同左：明の儒者・朱舜水による中国趣味の石橋

栗林公園（1640）：陰陽石を築山上に誇示

同左：池中の仙磯を浮かび上がらせるために護岸は簡素

岡山後楽園（1687～89）：曲水と茶庭型灯篭

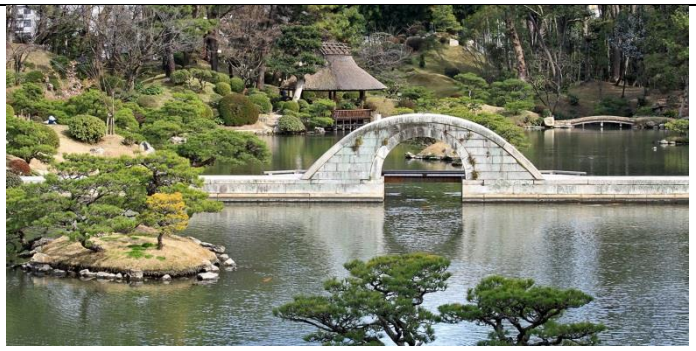


同左：巨大な陽石尽くしの庭。他に巨大な陽石幾多

六義園：陰陽石を引き立てるため、護岸石組が無い

同左(1695～1702)：仙人の住む洞窟が目を引く

天赦園(宇和島市・1670→1863 大改修)：陰陽石

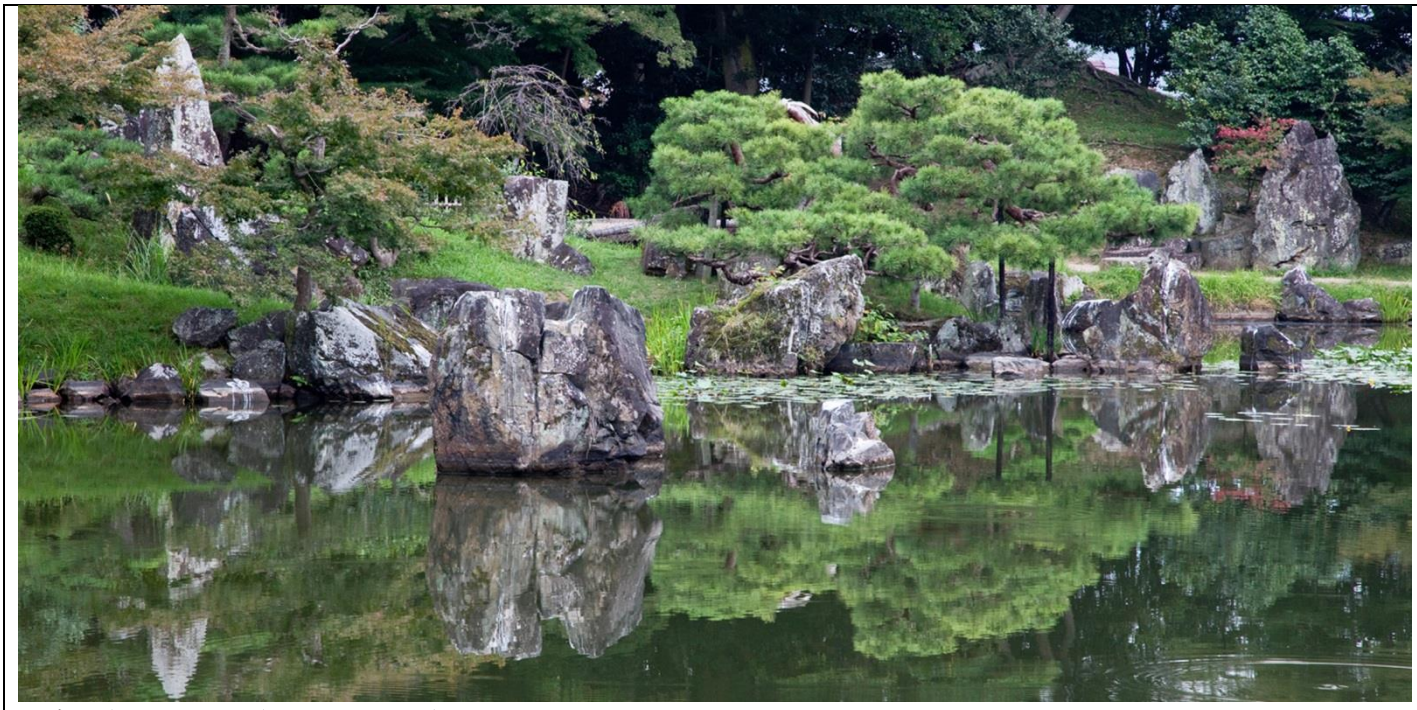


縮景園(広島市 1783～88))：西湖堤式の巨大な石橋に改修

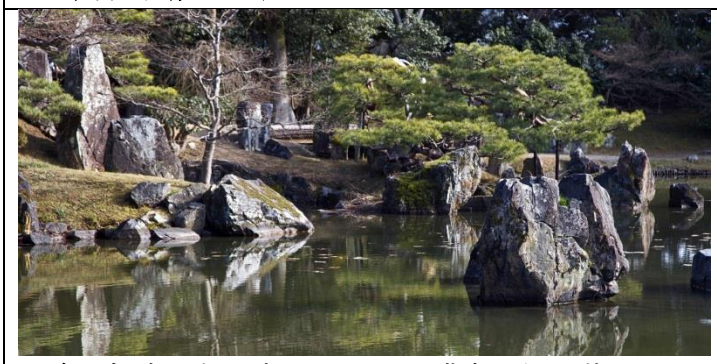
③ 池中への分散配石

日本庭園は室町時代に抽象枯山水庭園を生み出した。一方、池泉庭園においては護岸の修景が極地に達する頃には、築山上への石組の開始、陰陽石による修景、中国趣味の石橋、池中にランドマーク的な造形を作るようになった。しかし不思議なことに、池泉庭園においては枯山水における龍安寺のような抽象庭園が生れなかった。ところが唯一下に示す玄宮園（彦根城）があったのである。現在は睡蓮が生い茂り、松や紅葉の木が繁茂して肝心の石の造形が見え難くなっているが。

水の醸し出す静謐な雰囲気は、白砂よりも石組を浮き上がらせる抽象作用は大きいので、今後このような庭園が生れることを願っている。思うにコンクリートの建築に池庭を作ったならば現代的な抽象庭園が出来るのではないかと思う。



玄宮園（彦根城・1677）：池中への抽象的分散配石は、水により配石状況が一層明確になる（白砂と同様の効果）。



写真の視点を左に寄ってみると、護岸石組に苦心していないことが解る。池中の分散配布に傾注している。

鶴鳴渚を正面から見る

Ⅱ 古典庭園における枯山水庭園の抽象化のプロセス

1 枯山水庭園のメリット・デメリット

1・1 枯山水庭園のメリット

①水の供給、排水の可能な場所の確保が難しい
②漏水対策の経費が掛かる
③池庭には護岸対策が必要（池の周辺および神仙島周辺への石組）
④石は土中深く据え付け、池の表面から一定の高さを必要とした（必然的に大きくなる）。
⑤石と石の中間には白砂を敷けば石が浮かび上がって、石相互の関係性が明瞭になり抽象化庭園にしやすい
⑥テーマの選択性が広がる
⑦石組がしやすい

1・2 枯山水庭園のデメリット

①抽象庭園は簡単には創作しがたい
②施主が理解できにくく、発注されにくい
③鑑賞者の理解が得られにくい

2 抽象枯山水庭園のテーマ

枯山水庭園の場合は池泉庭園とは異なり、池庭ではないのだから護岸としての石組は不要であった。
本来であれば、池泉庭園の様な迂回しなくて抽象庭園がもっと多くできていてもよさそうである。
ただし、池庭のテーマの大半が神仙島（亀島や鶴島）である事から、枯山水庭園であっても神仙島のテーマから一気に離れることはできなかった。一遍に完全な抽象庭園を目指すことは無理かと思う。少しずつグレードアップした庭が出来、その庭の手法を理解し、試行錯誤を重ねたに違いない。以下にその経過を確認したい。

3 象徴庭園から抽象庭園への試行錯誤

抽象庭園を作るためには、新しい文化による刺激や天才的作家の影響などを視野において試論を記したい。

1 枯山水庭園の萌芽

西芳寺に洪隠山枯滝と言われる造形は通称「龍門瀑」と言われているが、本当にこの時代に作られたのか。
また小補陀石組が 1400 年代と言われているが、突然にこのような荒唐無稽な造形が出来たか不明。

2 龍安寺への道と龍安寺以降:

龍安寺が突然変異で出来たとは思えないので、その前後の時間と思われる庭園を区分して、造園手法の確立過程を探る。例えば以下の項目:遠近法的構成、弧状石組、借景式、環状石組、横三尊石組、方丈南庭ではない手法が共通。なお、現代においては禅寺の方丈に南庭に庭園を作る事には何の躊躇も無いが、室町時代においては、開祖の遠忌など最も重要な儀式をする場所であった。そのタブーを破ることが何故できたか。

①プレ龍安寺:常栄寺・龍源院・霊雲院・北畠神社:「龍安寺は一日にして成らず」で、その習作と思われる庭
②ポスト龍安寺:聚光院・願行寺:龍安寺を作った子建と思われる特徴の庭
③江戸時代初期の玉淵日首や桂運平による龍安寺的手法:大徳寺方丈・圓通寺・普門寺・雑華院・桂家庭園
小堀遠州またはその配下であった玉淵の作庭法は子建の手法を継承した。後世の桂家庭に影響か。

3 水墨画の三次元化の庭

日本庭園のテーマが不老不死(鶴亀蓬莱思想)から決別、水墨画による山水の風景をテーマとした。
例えば大仙院・退蔵院・福田寺・阿波国分寺・粉河寺である。

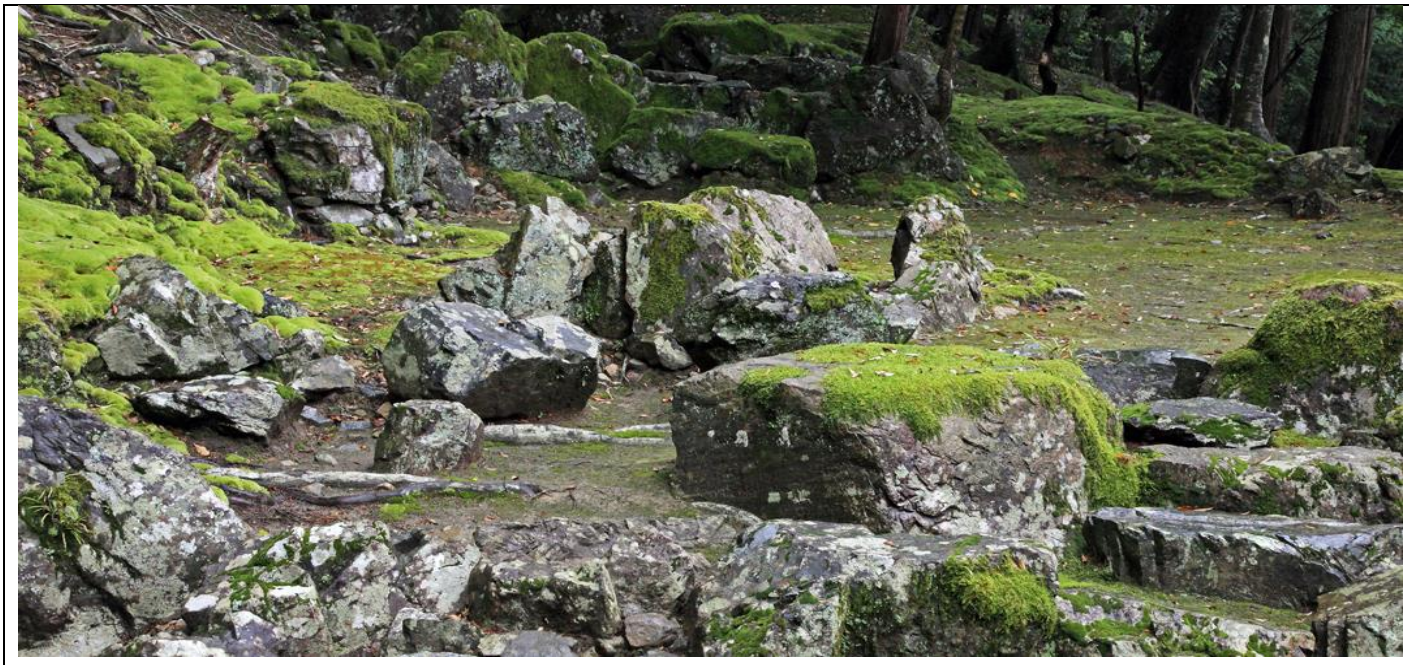
4 新しい造形を試みるも一進一退

江戸時代を通じて、それなりの進取の気風の作品であるが、テーマが鶴亀蓬莱では斬新な抽象庭園は不可能

5 江戸時代初期～末期の新しい試み

阿波国分寺・小河寺・青岸寺は大迫力の空間構成美の庭が江戸時代を通じて完成されたことを示す。
東海庵と久留島家（栖鳳楼庭園）庭園は江戸時代末期であるが、龍安寺スタイルではない新たな抽象庭園と云えまいか。

1 **枯山水庭園の萌芽：**西芳寺、栗林公園の先駆性と疑問



西芳寺（1339）：傾斜地に三段の滝と鯉魚石の龍門瀑がある。一方階段の上は修行僧の坐禅の場もある過渡期の庭

西芳寺（碑亭跡石組み・1339）：亀島形に組まれた石組

栗林公園（小補陀・1400 説あり）：西芳寺、天龍寺が作庭される頃に、このような抽象庭園が出来たとすると画期的であるが

2 龍安寺への道と龍安寺以降:

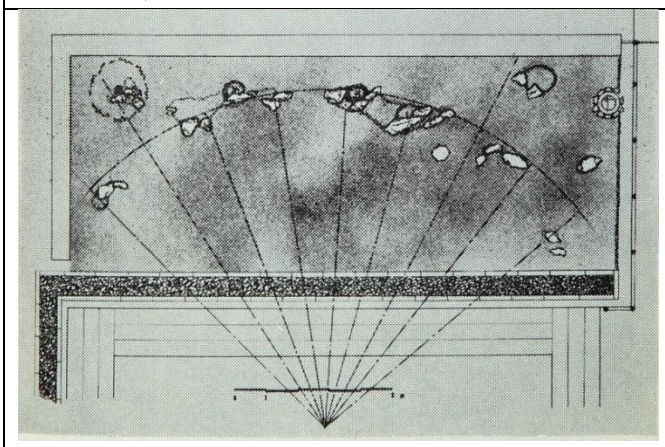
基礎的構図:遠近法的構成、弧状石組、借景式、環状石組、横三尊石組、方丈南庭ではない手法が共通。

- **①プレ龍安寺**:常栄寺・龍源院・霊雲院・北畠神社:「龍安寺は一日にして成らず」でその習作と思われる庭
- **②ポスト龍安寺**:聚光院・願行寺
- **③江戸時代初期の玉淵日首や桂運平による龍安寺的手法**:圓通寺・普門寺・雑華院そして桂家庭園

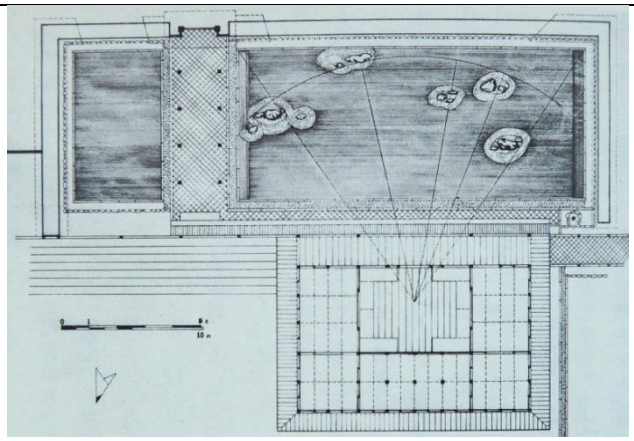
①プレ龍安寺:常栄寺・龍源院・霊雲院・北畠神社:「龍安寺は一日にして成らず」でその習作と思われる庭

常栄寺(雪舟寺)(山口市・1469～87):枯山水部の石組は水墨画の風景を遠近法的構成で組まれている。

龍源院(京都市・1517～23):主石は須弥山のように見えるが、左側のうねった石組は龍のようにも見える。当初は白砂か



龍源院:設計図で見ると、龍安寺のような弧状石組

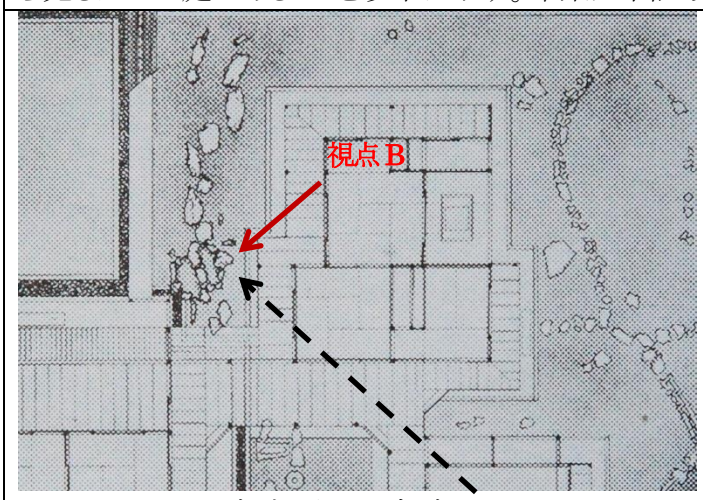


龍安寺:仮想復元した消失前の方丈から見ると弧状石組

霊雲院:旧書院**視点**Ａからの鶴島
特長的な横三尊石

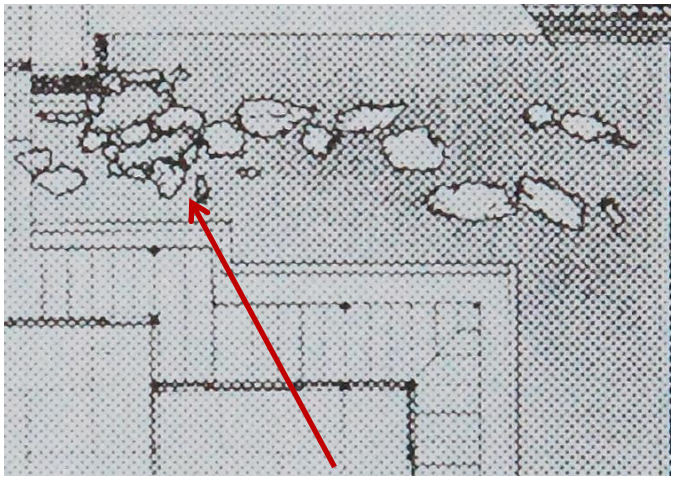
霊雲院(妙心寺・1526):旧書院の**視点** Ａ からの鶴島は鶴の両翼が明確に見え、西芳寺の鶴島、龍安寺の横三尊石組みと類似。なお、この環状石組は聚光院と類似

霊雲院の**新書院からの視点**Ｂは鶴島として鑑賞が出来ない。よって新書院が出来てからの庭ではなく、旧書院から見るための庭であることを以下に示す。本来は下記写真の右側には亀島があり、中央には蓬莱山があったか。



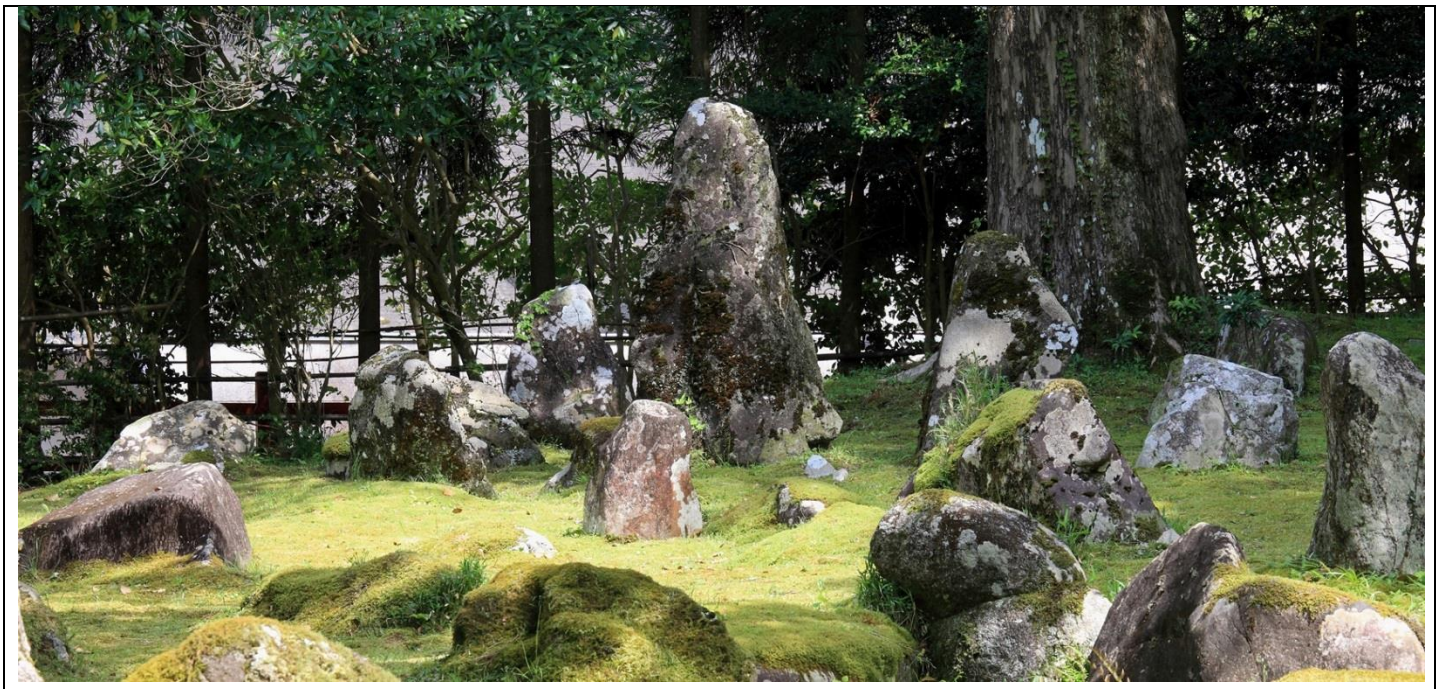
旧書院から見た視点**Ａ**

旧書院からの**視点Ａ**は左側に鶴島、右側に亀島が見えたと思われるが、現在は鶴島のみが残っている。



新書院から見た視点**Ｂ**（９０度右回転）

出典）書院図面・最上段写真は『龍安寺石庭』講談社と『龍安寺石庭』淡交社・大山平四郎著



北畠神社(津市美杉町・1529):九山八海のイメージを中心として九山が螺旋状に配石

龍安寺(京都市・1537):左から各群に分かれているが、各群の石数はⅠ群5石、Ⅱ群2石、3群3石、4群2石、Ⅴ群 3 石である。焼失後に移築した方丈と門の寸法が合わないためや、壁の外にある樹木は茂ってしまったが、当初は渡廊に壁は無く、樹木は茂っていなかったため東山、西山、洛中は見通せていたと思われる。

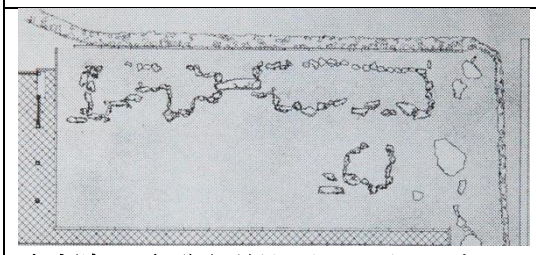
龍安寺:特徴的な横三尊石により子建作説の根拠

西芳寺:**子建**によって修理された特徴的な横三尊石

② **ポスト龍安寺**：聚光院・願行寺など龍安寺と直接関係性の近い庭

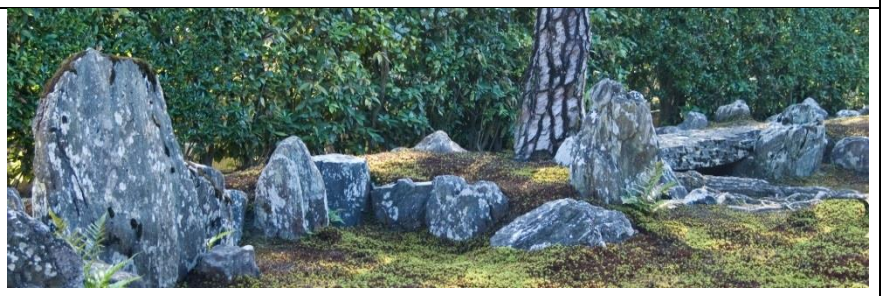
子建は横三尊石組みや、弧状石組、環状石組、七五三石組、遠近法的構成が得意な作庭家である。彼は龍安寺と西芳寺修復工事を1537年（52歳）に行っている。もし聚光院が子建の作とすると子建は80歳になる。

聚光院（京都市・1566）：手前に環状石組が、奥には二つの島を多くの石で囲んでいる。三箇所の石組は何かを象徴しているか不明



聚光院の平面図：単純そうに見える2島の石組は出入りが多く変化がある。右下の環状石組が気になる。

出典）出典）『龍安寺石庭』大山平四郎著



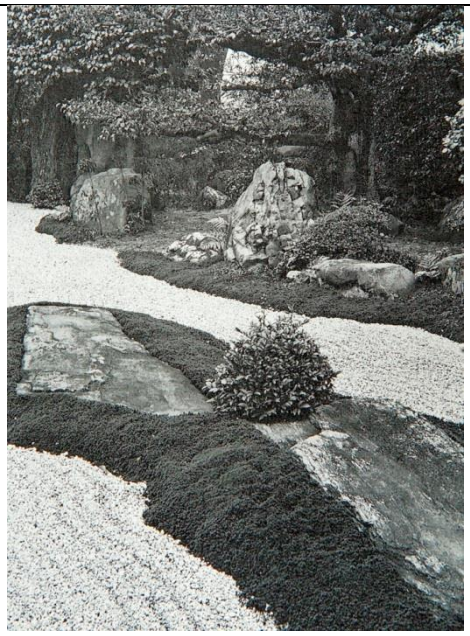
聚光院：左端の表面が平らな石は、一連の石の中で最も大きく、右側ほど小さくなっているので、遠近法的構成。またこの石の右側がくびれているため環状石組にも見える

願行寺（奈良県・1567）：海洋を栗石で象徴。周辺は護岸風に石組されているが、右端の環状石組は霊雲院、聚光院と関連あるか。つまり同一作家であれば子建と云える。

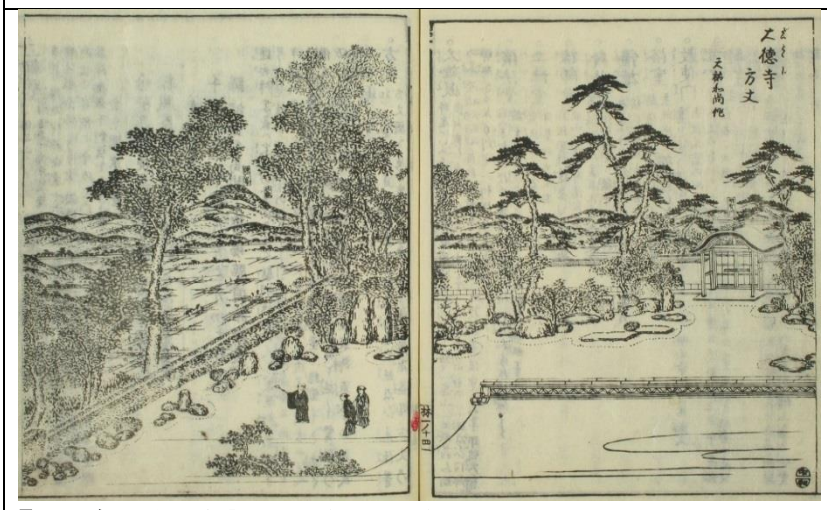
③ 小堀遠州(1579～1647)の後継者:玉淵日首(生誕不明～1661)と桂運平の業績に注目

玉淵は小堀遠州の三男小堀左馬之助正春(1596～1672)の配下として桂離宮などでの作庭にも従事していた。以下に示す圓通寺・普門寺・雑華院の庭を作っていることは判明している。石組の基本構造は弧状配石で、庭園の背後には比叡山・阿武山・双ヶ丘などの聖山を借景としている。彼は龍安寺のように抽象庭園を積極的に創作しようとした作庭家である。なお後世に与えた影響として、桂家庭園は L 字型の土地にほぼ弧状の石組がされていることや、随所に遠近法的構成がみられるところから、大いに関係していると推察する。

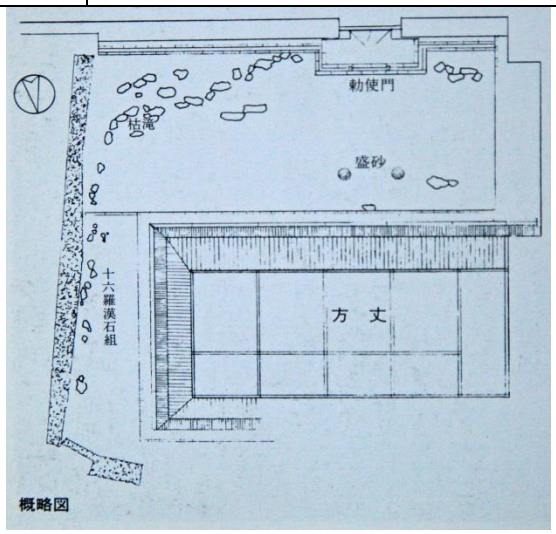
大徳寺・本坊(京都市・1636):出典)『日本庭園をゆく』No13　小学館
禅寺の総本山に相応しい堂々たる重厚さと品格の庭は何処から来たのか。



勅使門左にある二枚の板石は「達磨が葦の葉に乗って西来したという」葦葉達磨の象徴とも云える。『日本庭園鑑賞事典』齋藤忠一著

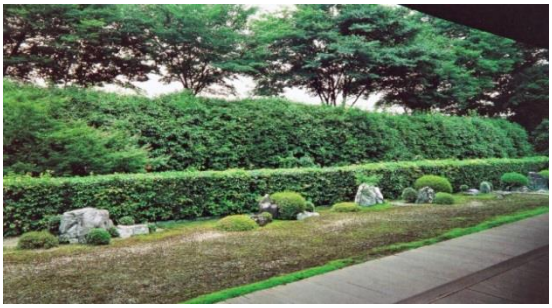


『都林泉名勝図会』上 38P(1799 年):約２２０年前の本では抽象枯山水庭園は大自然の風景とコントラストをなしていることが解る。もし、この庭が築山や橋など大自然の縮小した景色であれば、陳腐な箱庭だ。



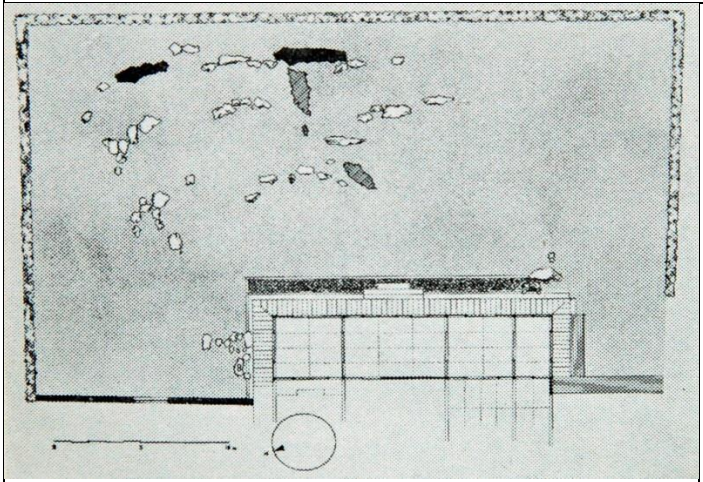
大徳寺方丈見取り図:弧状の石組や地割(方丈北側の幅が広い)は、恰も圓通寺や龍源院・龍安寺・雑華院・桂家庭園を思わせる。

『京華林泉帖』湯本文彦著　京都府(1909):比叡山、鴨川を借景

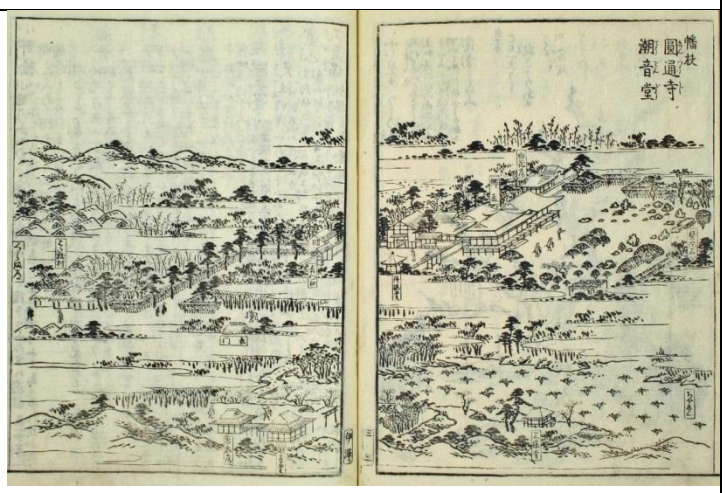


大徳寺　本坊方丈東庭:テーマは「十六羅漢石組」　出典)『日本庭園をゆく』No13　小学館

圓通寺（京都市・1648）：冬枯れの比叡山を望む石組の比叡山。設計図が示すように三波の波頭は、寄せては返す波の音が聞こえるようだ（「潮音堂」の由来か）。龍安寺の庭が静的で、この庭はダイナミックである。ただし石組間のツツジは本来の造形を壊してしまい残念だ。なお平面図では盤陀石が後列（黒塗り）に描かれているが復元を望む。なお、生垣の前後にある紅葉は自然界と人工界の拮抗関係を曖昧にしている。



出典:『龍安寺石庭』大山平四郎著 215P 講談社。
弧状配石的。無い設計図の黒塗り石は下記盤陀石、グレーは岩盤



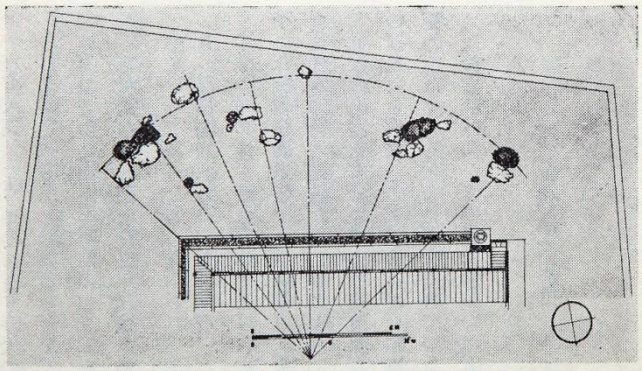
『拾遺都名所絵図（1787）』によると、名石の盤陀石が描かれ、更に現在苔地の場所は**白砂**であることが判明している。さらに右上のタイトルに「潮音堂」と書かれているが、更に画面下には潮音堂が描かれている

盤陀石①：図面右側か（現在は両石共、圓通寺玄関にある）

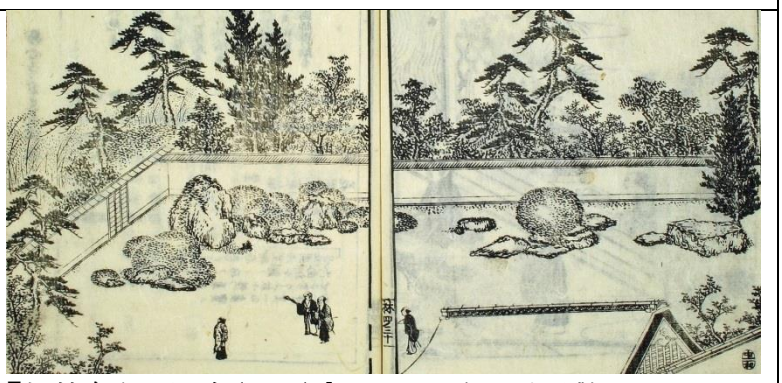
盤陀石②：図面左側か（現在は両石共、圓通寺玄関にある）

普門寺（高槻市・1654）：枯滝は橋をくぐって大河となって流れ下る。また阿武山を借景とする庭で圓通寺と共通点多い

雑華院（京都・1650 頃）



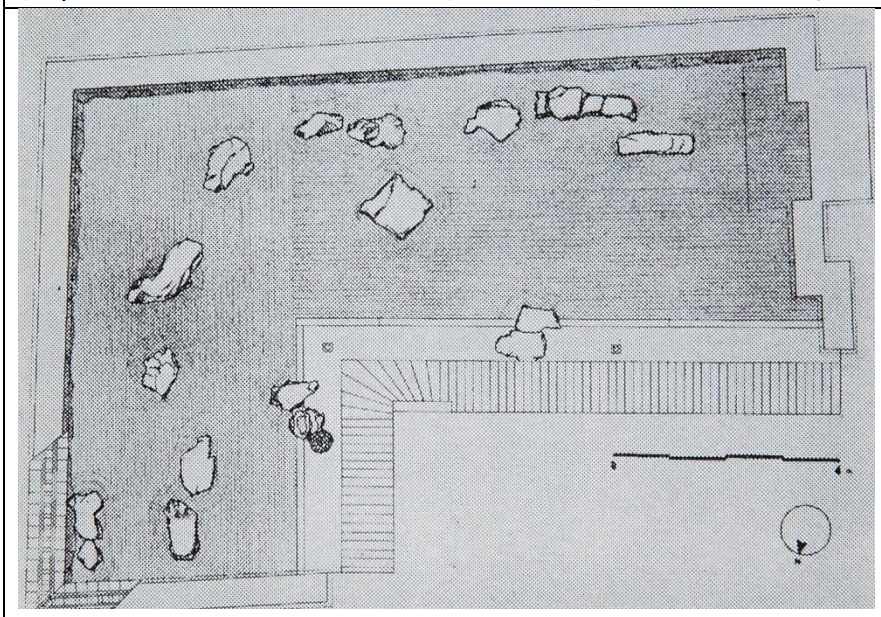
雑華院　出典:『龍安寺石庭』大山平四郎著 212P 講談社。弧状配石そのもので、かつ双ヶ丘が借景



『都林泉名所図会（1780）』によると、白川砂が敷かれていることが解る。テーマは釈迦の説教を十六羅漢が聞いている姿

桂家(防府市・1712)：天神山の聖山が望めるように土塀は低くした借景の庭。庭園の幅は奥ほど狭くした遠近法

桂家:L 字形部の左右には度肝を抜くような奇抜な石組みがある。石組は左から右へと視線を誘導している。



土塀の形に注目：遠近法的構成

視点を廊下の右端にすると、奥行きが出るように土塀との幅を変えている。驚くべきこの手法はの 16P の大徳寺本坊の手法を参考にしたか。龍安寺の系譜に属していることは明確であるが、この庭の意図は何であろうか。

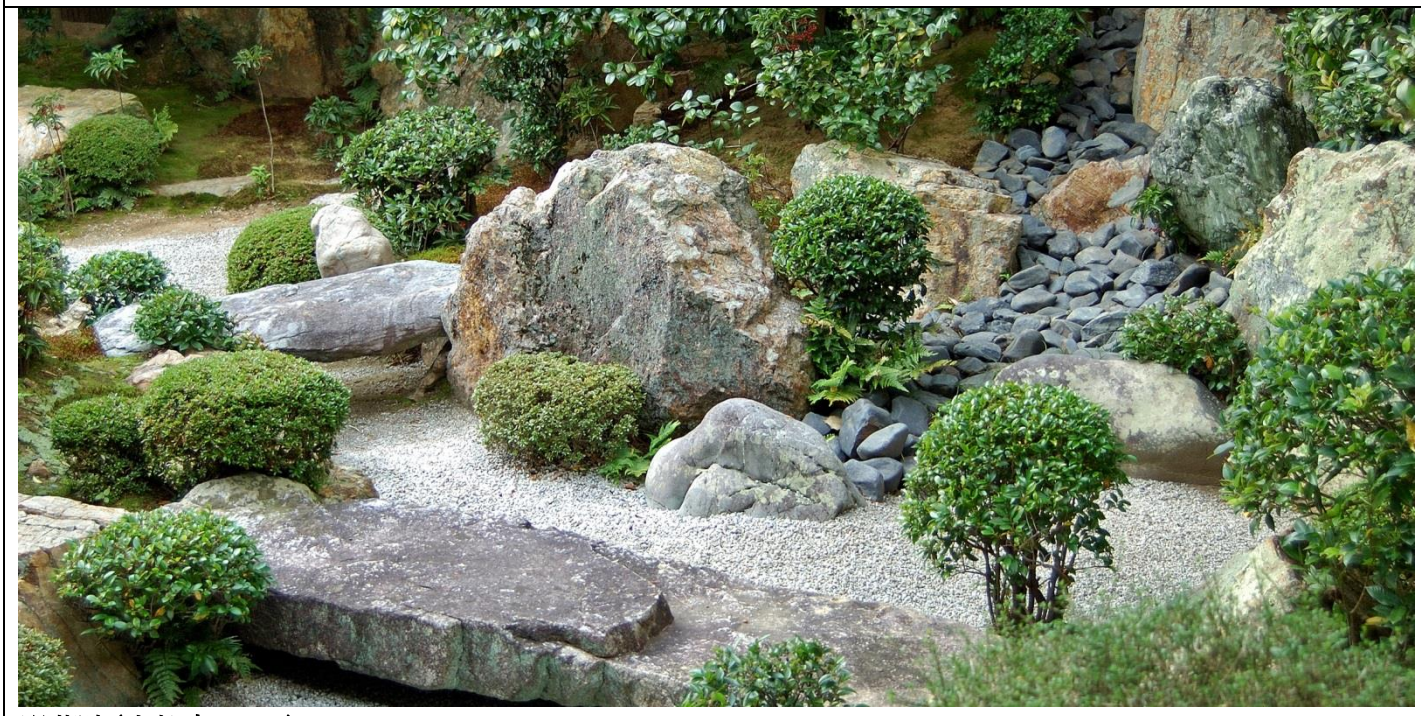
作庭の意図：三田尻港で風待ちしていた帆船が、東風が吹くと一斉に出帆する景色が脳裏にあったと思われる。しかし、このような景色を舟石を入れるような具象的に表現しようとしたのではなく、その背後にある「風の流れと船の動きを」抽象的に表現しようとした、と思われる。最も困難なテーマであればこそ、推敲に推敲を重ねて作庭したと思われる。

3 水墨画の三次元化の庭

絵画の手法は洋の東西を問わず、他の芸術に比べて先進的である。日本庭園の場合は主に奈良時代に中国の唐や韓国の百済・新羅から作庭手法を学んだと思われる。飛鳥時代にもたらされた神仙蓬莱思想の庭は、奈良～江戸時代を通じて一貫して主要テーマであった。しかし、室町末期からは足利家の舶来思想の影響もあってか水墨画を愛好するようになった。禅院の襖絵は観瀑の絵で満たされた。このような影響で庭園においても水墨画の手法を採用するようになった。このような潮流を受けて日本庭園のテーマが不老不死（鶴亀蓬莱思想）から決別し、水墨画による山水の風景をテーマとするようになった。

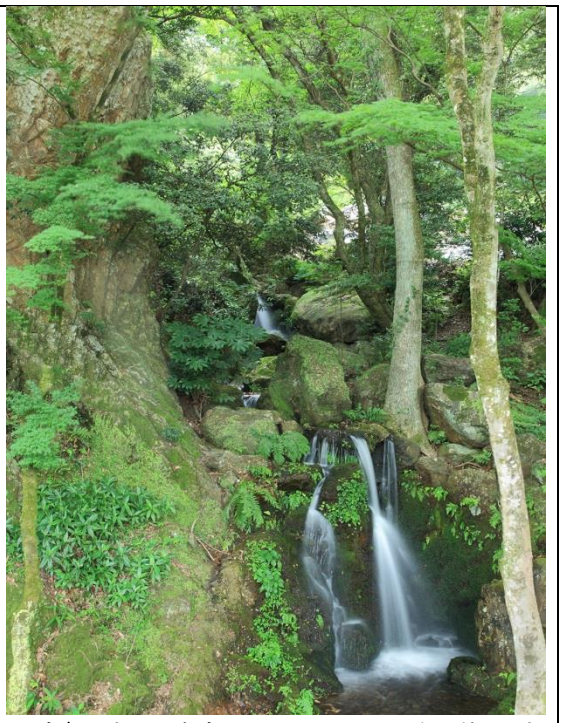
以下に大仙院・退蔵院・福田寺・阿波国分寺・粉河寺について記載する。

大仙院（大徳寺・1560 頃）：水墨画的な山水の象徴庭園であるが、やや具象的な印象はぬぐえないのは、水墨画は本来山水の写しであることに由来している。当寺には多くの観瀑の水墨画があり、それと関連させた庭。



退蔵院（京都市・1558）：地上に描かれた琴棋書画図。狩野元信説の根拠は、彼が霊雲院に書いた「琴棋書画図」」にそっくり

岐阜城(岐阜市・1567):左側の反り立つ岩盤は鑿で穿かれ、水墨画のオーバーハングの造形が人工的に作られている。水墨画の世界を実寸大に再現した豪快な庭



同左):庭は渓流沿いに段々地形を作り庭園や建物が配していた。

福田寺(米原市・1643):要所に稜角の鋭い大きな石組、手前が低く奥ほど高い構成が逆遠近法構成

阿波国分寺【徳島市・江戸時代初期(末期に改修)】:巨石は五老峰の形そのもの。枯滝は李白の詠んだ瀑布を象徴

粉河寺（和歌山県紀の川市・江戸時代末期）：圧倒的な存在感を示す日本庭園。所々に屹立する石は水墨画の世界。

粉河寺：手前の石組は鶴島、亀島の古いテーマであるが、背後にある五本の巨石は水墨画由来の造形であることを教えている。また峡谷の上部には石橋が架かっているが、これは玉澗式石橋といって、中国の天台山方広寺にある「石梁飛瀑」の様を表している。

4 新しい造形を試みるも一進一退 ：各時代ともそれなりの進取の気風の作品であるが、何しろテーマが古い

徳島城（徳島市・1600～1603）：段差のある地形に鯉魚が龍に化身する姿を暗示した。雪舟の常栄寺以来だ。

徳島城（徳島市・1600～1603）：作者の上田宗壺は鶴を象徴したとは思えない斬新な造形。テーマは古いが革新的な庭

本法寺（京都市・1600 頃）：本阿弥光悦の伝承説を裏付ける華麗な枯滝と目の字石と蓮池の斬新なデザイン

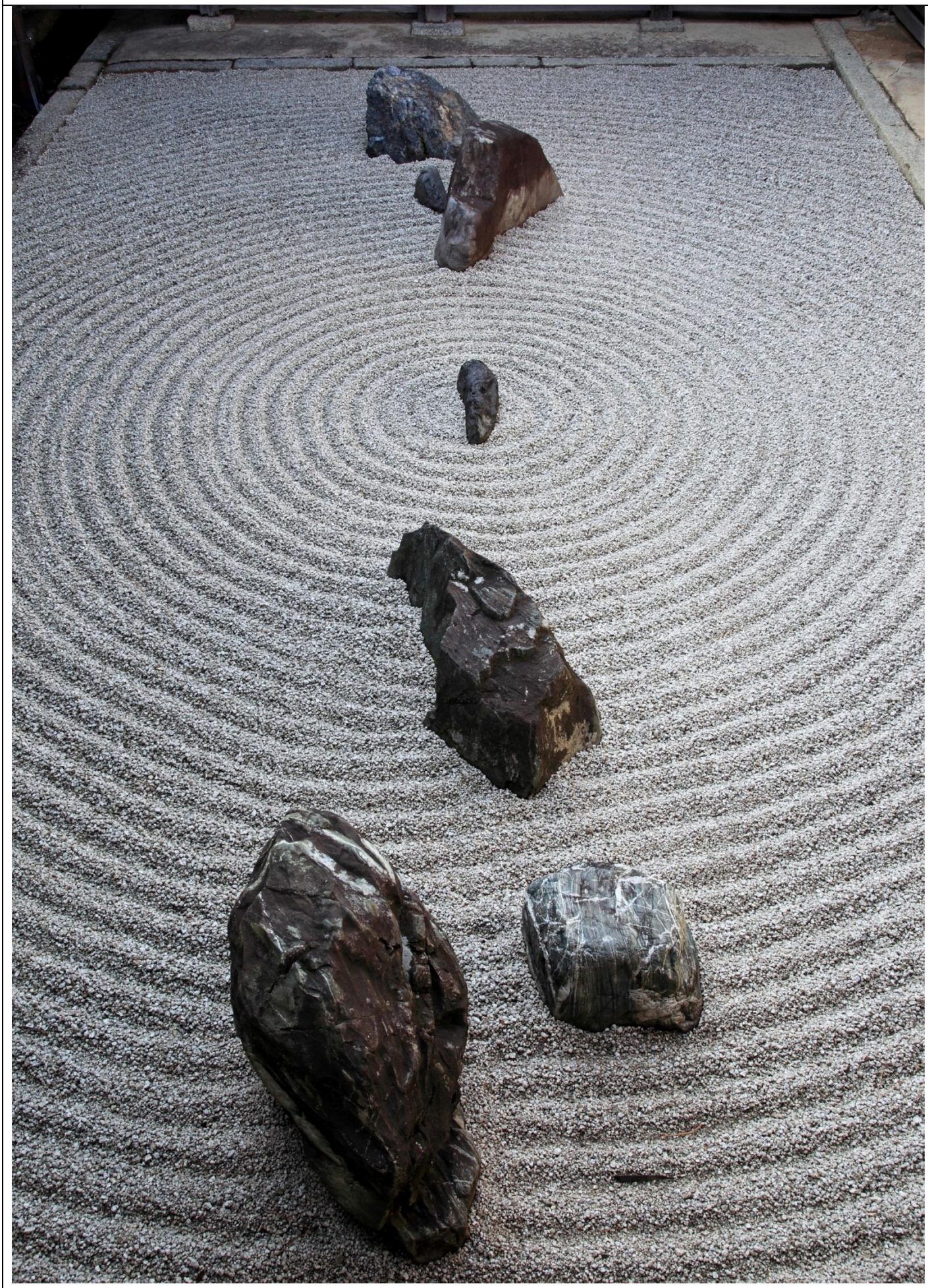
西本願寺（京都市・1611）：聚楽第から移したと言われる安土桃山時代の庭。鶴亀島は陳腐であるが枯滝と切石は秀逸

金地院（京都市・1632）：幾何学模様の庭の創作。神仙島（鶴島）への石組は凄まじく、テーマは古いが神仙島への石組造形は新境地と云える。

酬恩庵（京田辺市・1650）：右側の枯滝は大仙院よりも力強く迫力ある。しかし左側の鶴亀兼用石組と蓬莱山は禅寺には不釣り合いな陳腐なテーマ。江戸時代の治安が安定した割には先進的な造形ではなく、復古的な造形。

5 江戸時代初期～末期の新しい試み

東海庵と久留島家は龍安寺形から脱皮した抽象枯山水の傑作である。青岸寺・阿波国分寺・粉河寺の庭は空間構成美の庭で大迫力の庭の極致。（備考：阿波国分寺と小河寺は、上記 3 水墨画の三次元化の庭 21・22P にも記載）



東海庵（京都市・東睦宗補和尚 1814）：厳粛で静謐な抽象枯山水庭園の傑作。龍安寺形から離れた事例。

久留島家（玖珠町・1832）：当庭は九重山を借景とした庭である。造形は九山八海を象徴しているが、石組は完全に独立した抽象庭園を達成した。常栄寺・龍安寺などの石組は 2～5 石の石組みが分散配布しているが、当庭は全石共独立している。

青岸寺（米原市・1678）：地割の特徴は間口に対して奥行きが深く、奥に行くに従って山畔が高くなり、更に最深部の三尊石部は盛土までしており、奥行きのある立体造形は見どころである。この地割こそが傑作庭園を生み出している。
350 年も前に疲れを厭わず、累々と積み上げた稜角の鋭い造形に驚嘆。この種の空間構成美の庭としては最高峰。

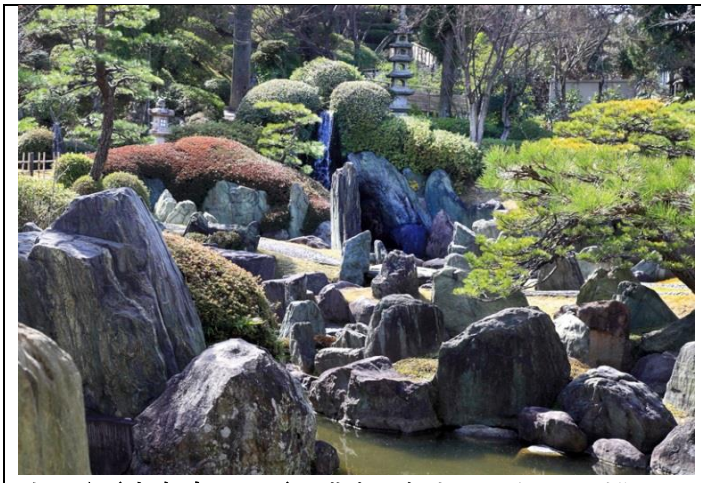
阿波国分寺（徳島市・江戸初期なるも末期に改修あり）：天橋石組背後の枯滝が石組を潜って流れる激流（21P 水墨画にも記載）

粉河寺（紀の川市・江戸時代末期）：庭園は段丘上に造成された擁壁部に石組みされた比類なく豪快な庭（22P 水墨画にも記載）

Ⅲ 重森三玲の護岸石組に関する考え方

1 重森三玲の池泉庭園

①古来よりの護岸石組をした例を示す。施主の要望などで石組の面白さを強調している。



半べえ（広島市・1971）：護岸と島中の石組は煩雑に

善能寺（京都市・1972）：小さな庭に巨石護岸

②抽象化した護岸

池の周辺および鶴亀島の護岸石組は無く島中に鶴・亀の造形を石組している。これを可能にしたのはコンクリートの台を作り、その上に土盛りをして石組をし、樹木を植えた。下記庭園の喫水線を見ていただくと、コンクリートらしき様子が見て取れる。さらに下段に示した松尾大社では構造が解る。但し島中と池中の立石の配石の仕方を明確にする必要がある。

高臺院（高野町・1963）：僅かに見えるコンクリート基盤

正智院（高野町・1973）：僅かに見えるコンクリート基盤

松尾大社（京都市・1975）：重森三玲が設計はしたが、完成は子息の完途氏である。島中と池中の石組の配石基準があいまい。

2 重森三玲の枯山水庭園

2・1 枯山水で神仙島や鶴亀島のある庭園：個人庭園の場合は施主からの要請に応じた苦心の手法

①護岸的要素の庭:神仙島をテーマとしているため、海洋に浮ぶ島の様子を明確にし、かつ島中に石組あり斬新

田茂井家（京丹後市・1970）:洗出し工法による護岸

深森家（豊中市・1970）：洗出し工法による護岸

芦田家(尼崎市･1971)：枯山水であるが古来の護岸的造形を示し、島中に石組をした新しい造形手法を創作

②全く護岸を意識させない庭（護岸を拒否）

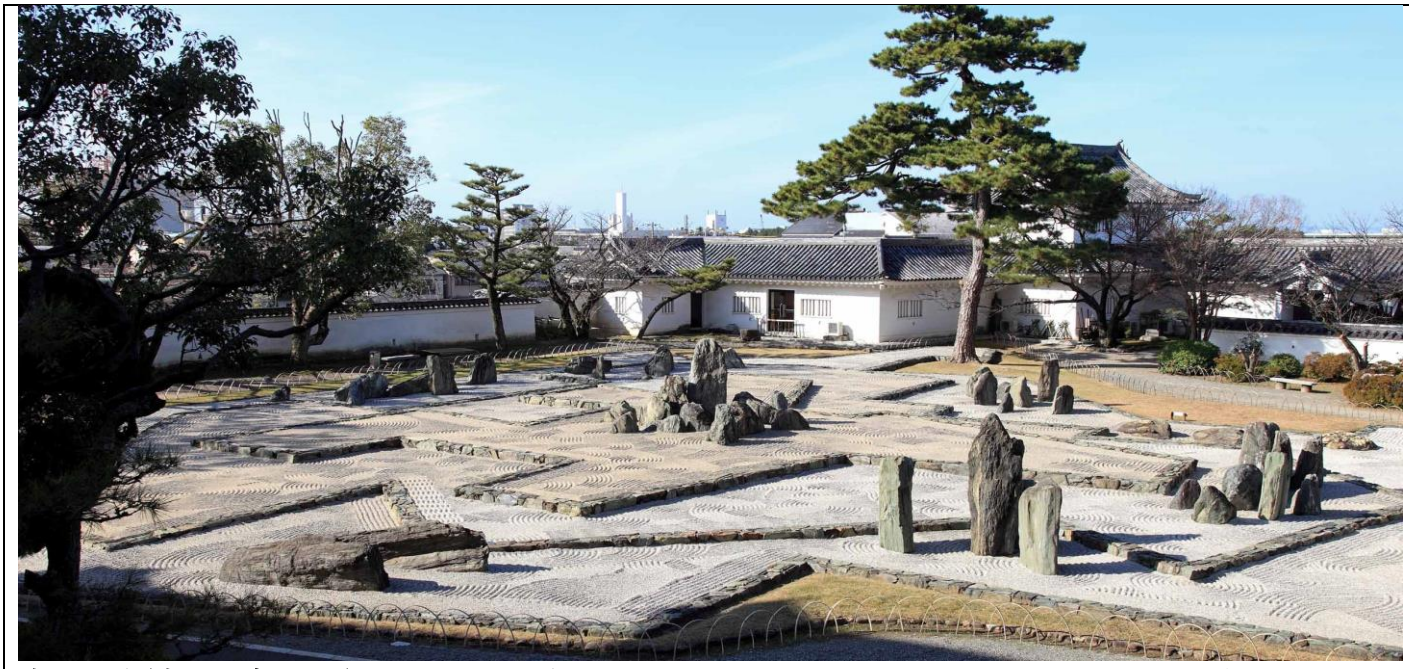
東福寺本坊・南庭：神仙蓬莱島をテーマに採用しているが、海洋に浮かぶ島々である事は造形上で解らせようとしていない。もし、この造形に護岸らしき石組や洗出し工法を行ったならば、禅寺としての厳粛な雰囲気や芸術的な抽象性は失われてしまうだろう。重森は神仙島の説明よりは造形本意の石組に傾注した。

旧重森家：重森の旧自庭だけあって、神仙島である事の説明的要素を省き、石の個性を生かした自由な石組を楽しんでいる。

東福寺本坊・南庭（京都市・1939）：護岸無き神仙島。
枯山水庭園とはいえ神仙島は海洋に浮遊しているが、護岸を排除した

旧重森家（京都府・1970）:護岸石組を入れると煩雑な造形になり、護岸拒否の庭

2・2 枯山水庭で護岸が全く不必要なテーマ（神仙島、鶴亀島、龍門瀑などの象徴庭園を想起させない造形）



岸和田城（岸和田市・1953）：大将陣を取り巻く八陣が構成する、巨大な空間構造は日本庭園の芸術性を示す

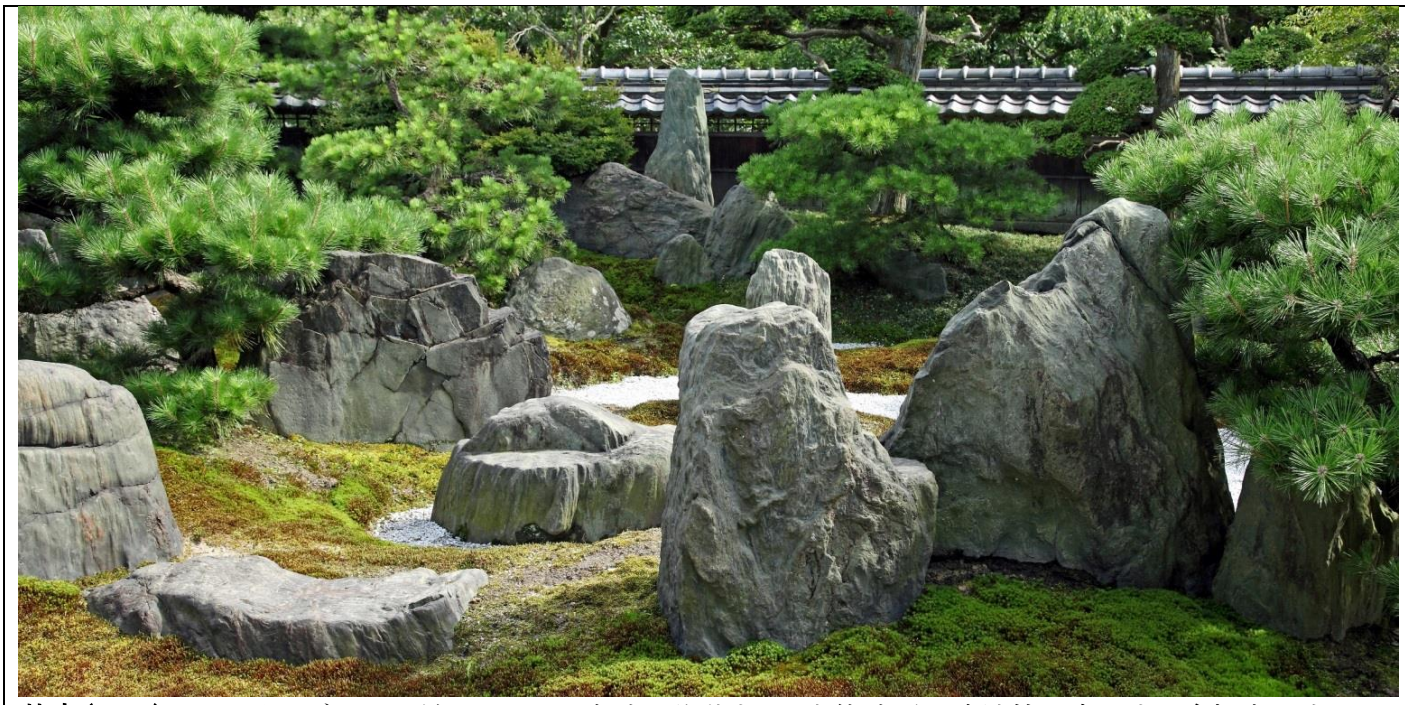
前垣家（東広島市・1955）：手前中央の個性的な縦石と横石が構成する空間構成は、現代日本庭園の傑作

織田家（西条市・1957）：石組の周囲には洲浜が取り巻いているが、石組には護岸の意識は皆無

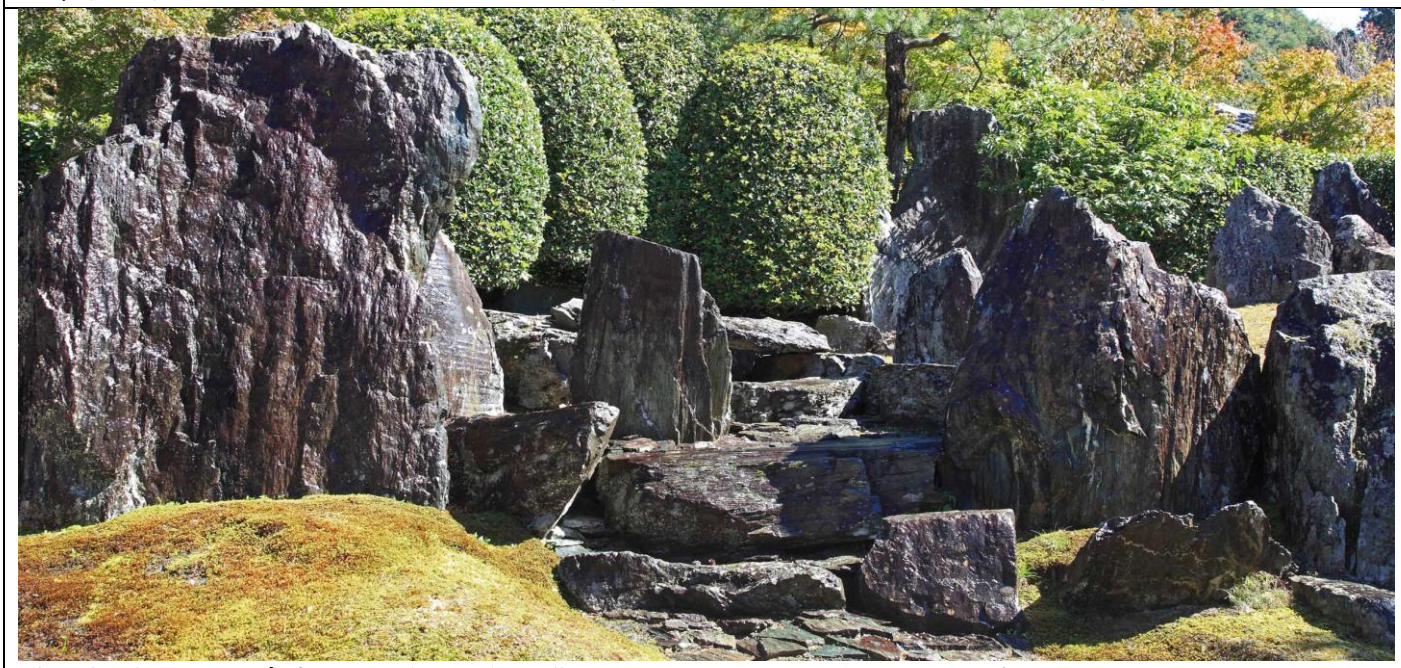
龍源院（作者は鍋島岳生・大徳寺山内・1960）：四方を廊下に囲まれた極小の庭に不思議な空間が出現

香里団地公園（枚方市・1961）：公園内に自由な配石が醸し出す興味をそそる空間

興禅寺（木曽福島町・1963）：生い茂る木曽谷に突然出現した人工造形は、大自然の迫力と拮抗する

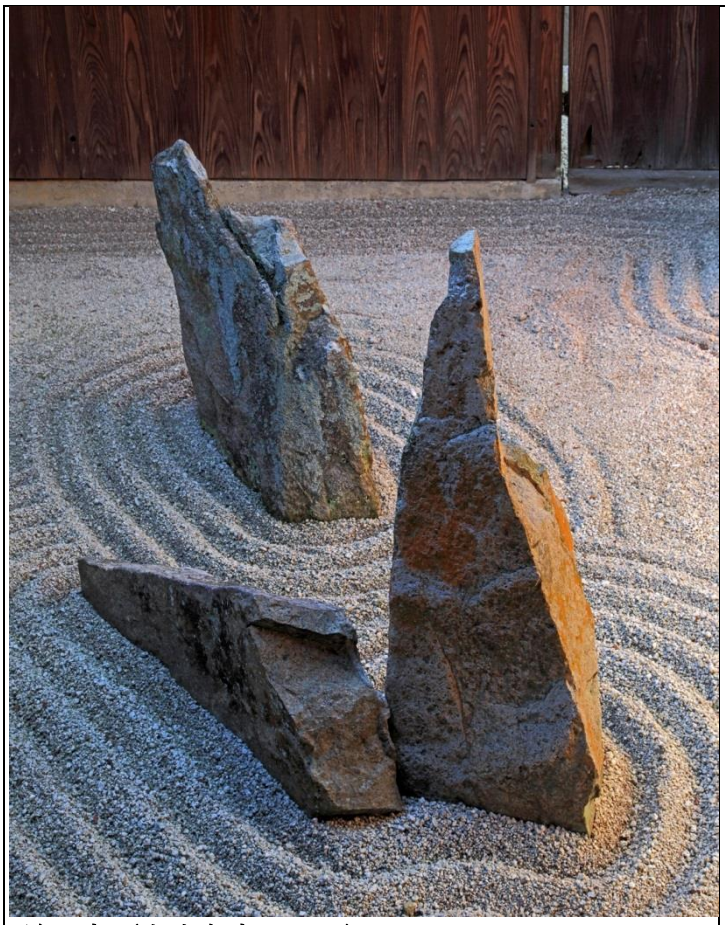


某家(1968)：巨石がほぼ４列に並んでいて、書院を移動すると立体造形は連続的に変化する多視点の庭



漢陽寺（山口県周南市・1973）：芸術性豊かな人工造形物は芸術の力が永遠で巨大であることを示す

松尾大社（京都市・1975）；松尾山の神々が降臨して自由に語らっている姿。石組の空間構成美の傑作



前垣家（東広島市・1955）：
13 ㎡の中庭に 1m にも満たない高さの石が３石ある。この庭の不思議な輝きは未来永劫放ち続けるだろう

松尾大社（京都市・1975 重森の遺作）
遺作に相応しく重森の集大成の作品。神と石と重森の精神が一体化したと言える。

清原家（芦屋市・1965）：
地上に描いた立体絵画の華

旧友琳会館（岡山県吉備中央町・1969）：
重森の故郷の庁舎へ帰ったとも云える画期的な庭